

されば正法を攝受するものは自ら正智を成就し、正智を成就すると共に一切衆生に對する慈愍哀護の念愈々あつく、佛の化導を輔け奉らんが爲に、身命を惜まらずして力を盡すに至るべきこと明である。

然らば佛の化導はいかにして行はれ來つたか。十方世界に出現したまへる佛の數は無限であるといふ、其の所説の教法も亦た必ずや無限であらう。是れ吾等の力を以て窺ひ悉し難き所ではないか。而も釋尊は明に吾等に示して、『諸佛は語異ること無し、佛の所説の法に於て當に大信力を生ずべし』と仰せられた。また『諸佛世尊は一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ。……諸佛世尊は衆生をして佛知見を開かしめ清淨なることを得せしめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見の道に入らしめ

んと欲するが故に世に出現したまふ。是を諸佛は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと爲す』ともある。(法華經方便品)是れ諸佛の世に出現したまへる目的が一切衆生をして共に佛と作なることを得せしむるに在ることを明すものである。而してまた、『諸佛如來は但だ菩薩を教化したまふ。諸の所作有るは常に一事のためなり。唯だ佛の知見を以て衆生に示悟したまはんとなり。如來は但だ一佛乘を以ての故に衆生の爲に法を説きたまふ。餘乘の若は二、若は三あること無し。一切十方の諸佛の法もまた是の如し。過去の諸佛の無量無數の方便、種々の因縁譬諭言辭を以て衆生の爲に演説したまふ、是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の諸佛に従て法を聞けるもの究竟して皆一切種智を得たり。未來の諸佛の當に世に出たまふべきも、亦た無量無數の方便、種々の因縁譬諭言辭を以て衆生の爲に諸法を演説したまはん、是の法も皆一佛乘の爲の故なり。

り。是の諸の衆生の佛に従て法を聞かんもの、究竟して皆一切種智を得べし」とも仰せられた。

此によつて吾等は、十方世界に出たまへる無数の佛の説きたまへる所の法も、釋尊の所説と相異なること無きを知る。而して其の無量無限の教の歸する所は盡く一なるべきことを知るのである。然らば歸する所一にして而も所説の無限なるは何の故であるか。釋尊は更に之を解いて、「衆生の垢重く慳貪嫉妬にして諸の不善根を成就するが故に、諸佛方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と説きたまふ。若し我が弟子、自ら阿羅漢、辟支佛なりと謂ひて、諸佛如來の但だ菩薩をのみ教化したまふ事を知らずんば、此れ佛弟子には非ず。又諸の比丘比丘尼、自ら己に阿羅漢を得たり、是れ最後身なり、究竟涅槃なりと謂ひて、便ち復た阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらんは當に知るべし。此輩は皆是れ増上慢の人なり」と仰せられた。さらば阿

羅漢たり(阿羅漢は聲聞の極位)辟支佛たるも(辟支佛は縁覺とす)畢竟菩薩たるの階梯にして、若し阿羅漢たり辟支佛たるに甘んじて、更に進んで菩薩の行を積まんとを求めぬ者は、佛弟子たるを許さるべきものではない。眞に攝受正法の人と謂はれ得べき者は、固より自ら誓つて菩薩の道を修め、又佛の化導を贊けて、一切衆生を教化するに力を致し、悉く一佛乘に歸せしめんことを目的として奮勵すべきや言ふを俟たぬ所である。

佛の在世は限りがある、而も正法の流布は無限である。正法を攝受する者相次いで世に出て、相次いで流布に力を致すに於ては、娑婆世界を化して寂光淨土とすべき理想は必ず實現し難きものではない。法の永く世に傳はることは一に斯る善男子善女人の力に依る。故に之を稱して『世の法母なり』といふのである。斯る善男子善女人が世に立ちて法を弘むるは一に其の絶大なる慈悲心の發露に依るを以て、之を稱して『普く衆生の爲に

不請の友となる』といふのである。此等の人は皆佛智を成就し得たるに近しい者であつて、衆生の機根の淺薄勝劣を辨ふること尤も詳である。されば其の機根に應じて或は善根を植ゆべきを教へ、或は小乗の教を與へ、或は大乗の教を與へ、漸く導いて終に一佛乘に入らしめんことを期するのである。それは猶ほ佛の在世に法を説きたまへる所の如くである。『重任を荷負するに堪能なり』と稱せらるゝも謂なきことではない。其の佛と法とに配し、三寶の一として貴ばるゝは之が爲である。

餘論 (十一)

菩薩の大行に名けて波羅蜜といふ。之を譯しては度といふ。また其の義によりて三譯がある。一には事究竟といひ二には到彼岸といひ、三には度無極といふ。一に此の大行は一切の自行と化他の事を悉すが故に名けて

事究竟といふ、二に此の大行は能く生死の此岸を越えて、涅槃の彼岸に到らしむるものなるが故に名けて到彼岸といふ。三に此の大行は凡ての事理を悉し、諸法の廣遠なるに度つて盡く之を明にするの力あるが故に名けて度無極といふのである。三譯の語異れりと雖も、その意は同うして別無きものである。

波羅蜜に六種を別つのであるが、その第一は檀波羅蜜である。檀とは檀那の略で、譯しては布施といふ。無量壽經に「恩を布き恵を施す」とあるのが是れである。維摩經に「布施は是れ菩薩の淨土」とあるのは、即ち菩薩の身を此の行に安んじて、力を盡すべきを明すのである。智度論には淨施と不淨施を分ち、また財施と法施を分つてある。施を爲すに當つて世間の名聞福利を求めず出世の善根を積み涅槃の因を資助するが爲に、清淨心を以て布施するのを名けて淨施といふ。妄心を以て福利を求めんが爲に

布施するのを名けて不淨施といふ。不淨施は波羅蜜の一に數へらるべき
 値あるものではない。又財施とは飲食衣服田宅珍寶及び一切資身の具を
 以て悉く能く之を施すをいふ。法施とは諸佛及び善智識に従つて世間出
 世間の善法を聞いたのを、清淨心を以て轉じて他の爲に説くをいふのであ
 る。(此事は前にもいふ爲に重ねて出ず、波羅蜜)

第二は尸羅波羅蜜である。譯しては止得といひ、惡を止め善を得るの謂
 である。又その意によつて譯して性善ともいふ。好んで善道を行じて自
 ら放逸ならざるの義である。汎く行はるゝ所の譯語は持戒で、維摩經に「持
 戒は是れ菩薩の淨土」といふもの即ち是れである。身心放逸なれば如何
 なる善法も入り難きものである故に涅槃經には「戒は是れ一切善法の梯
 橙なり」とある。持戒によつて身口意の三業みな缺無きを得れば、有らゆ
 る善を爲すの力隨て生ずべきである。地持論には、「三十二相差別の因無

し、皆持戒によつて得る所なり」とある。戒を持つことは尤も慎重にして
 細心なるべきで、一の缺あるも菩薩の位を保つに於て甚だ悔多きものであ
 る。法華經に「持戒清潔なること淨き明珠の如し」とあるのも、一點の缺
 くる所無きを稱するのである。菩薩は自ら嚴かに戒を持つと共に、また人
 に勸めて共に嚴かに戒を持たしめ、その身口意に於て些かも悔無く、能く佛
 道の中に安住するを得せしめんことを期せねばならぬ。

第三には屬提彼羅蜜である。屬提を譯して忍辱といふ。維摩經には「忍
 辱は是れ菩薩の淨土。菩薩成佛の時、三十二相莊嚴の衆生其の國に來生す」と
 ある。僧肇はこれに註して「忍辱なれば和顔なり、故に繋くるに容相を
 以てす。而も豈にたゞ形の報のみならんや」といつた。蓋し忍辱によつ
 て得る所の報の尤も大なるをいふのである。忍辱に二種あり、生忍と法忍
 とである。生忍とは恭敬供養せらるゝも憍慢の念を生ぜず、嗔罵打害にあ

ふも怨恨の念を生ぜぬをいふ、法忍とは寒熱風雨飢渴等の惱害にあひても能く安んじ能く忍んで瞋慧憂愁を生ぜぬをいふ。能く二種の忍を行じて、安然として動かざるを、名けて忍辱地といふ。法華經に「菩薩摩訶薩忍辱地に住し柔和善順にして卒暴ならず」とあるのは是れである。忍辱の心は一切の外障を防ぐが故に之を衣に譬へて、忍辱衣といふ。法華經には「如來の衣とは柔和忍辱の心是れなり」とある。又忍辱の心はよく一切の外難を防ぐが故に之を鎧に譬へて、忍辱鎧といふ。「惡鬼その身に入て我を罵詈毀辱するも、我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を著るべし」(法華經)といふのは是れである。傳ふる所によれば、ひかし毘婆尸佛の時に、波羅捺國の王に太子あり、其名を忍辱といつた。太子の父母病重き時、醫のいふには、瞋らざる人の肉を以て藥となせば病癒ゆるであらうと。太子は之を聞いて我生來瞋らず、因て忍辱を以て名として居る。我が肉を以て藥に充つるこ

とにしやう。國中にたとへ瞋らざる人ありとも、其の肉を以て父母を救ふには忍びぬと。乃ち自ら肉を割いて藥に充て、病幾くもなくして愈えた(經律異相による)忍辱の人は自ら柔和仁慈の徳を具ふべきこと勿論である然らずんば何ぞ忍辱と稱することが出來やう。

第四には毗梨耶波羅蜜である。譯して精進といひ、また譯して勤ともいふ。唯識論には、「勇悍を性と爲し、懈怠を對治して善を滿ずるを業と爲す」とある。慈恩上生經の疏には、「精とは精純にして惡雜なきが故にいひ、進とは昇進して懈怠ならざるが故にいふ」とある。華嚴大疏には、「心を法に練るを之れを名けて精といひ、精心にして達せんことを務むるを、之を目して進といふ」とある。止觀輔行には、「法に於て無染なるを精といひ、念々に趣求するを進といふ」とある。此等の諸解を相參へて精進の義を明にすべきである。精進を分つて二とすることは智度論に依る、いはゆる

身精進と心精進とである。身精進とは善法、行道、禮誦等を勤修し、また人の爲に講説して自ら放逸にせざるをいふ。心精進とは勤めて善道を行じ心々相續して自ら放逸にせざるをいふ。又成唯識論には三種の精進を分つてある。被甲精進、攝善精進、利樂精進である。菩薩の勇猛心を以て種々の難行を怖れざるを被甲精進といふ。勤めて善法を修して倦まざるを攝善精進といふ。勤めて衆生を化して倦まざるを利樂精進といふ。法華經には精進鎧の語がある、いはく「汝等當に共に一心にして精進の鎧を被り、堅固の意を爲すべし」と。是れまた難行を怖れぬを謂ふもので、被甲精進に當るのである。

第五には禪波羅蜜である。禪とは禪那ぜんなの略で、譯しては靜慮といひ、心を專にして念を歛くわめ、一を守りて散せざるの謂である。又思惟して之を修得するが故に、名けて思惟修ともいふ。法華經には「深く禪定に入りて十方

の佛を見る」とある。蓋し禪定によつて有らゆる惑を斷じ盡したる境界をいふのであらう。月燈三昧經には禪定について十種の利益を擧げてある。一には安住儀式。菩薩諸の禪定を習ふには必らず威儀を整肅する、一に法式に遵じて之を行ずること既に久しければ、即ち諸根寂靜にして正定現前し、自然に安住してまた勉強することを須すむぬに至る、これを安住儀式といふ。二には行慈境界。菩薩諸の禪定を習ふに常に慈愛の心を存して傷殺の念無く、諸の衆生に於て悉く安穩ならしむる、これを行慈境界といふ。三には無煩惱。菩薩諸の禪定を習ふに諸根寂靜なれば、則ち貪瞋痴等の一切の煩惱自然に生ぜず、これを無煩惱といふ。四には守護諸根。菩薩諸の禪定を習ふに、常に眼耳鼻舌等の諸根を防衛し、色聲香味等の諸塵の爲に擾さるゝことなし、これを守護諸根といふ。五には無食喜樂。菩薩諸の禪定を習ふに既に禪悅の味を得て以て道體の資とすれば、飲食の奉無しと雖も

自然に欣豫の念に充される、これを無食喜樂といふ。六には遠離愛欲。菩薩よく禪定を修習し一心を寂黙にして散亂せしめざれば、則ち一切愛欲の境悉く染著すること無し、これを遠離愛欲といふ。七には修禪不空。菩薩諸の禪定を習ふに諸禪の功德を獲て真空の理を證すと雖も、斷滅の空に墮することは無い、これを修禪不空といふ。(此の一項は特に深く意を留むべきである。斷滅とは因果の理を無視するの邪見で、また斷見ともいふ。是れ邪見中の極惡のものである。一たび斷見に墮すれば佛に對して敬心を有せず、衆生に對して慈心を有せぬに至り、佛弟子たるの實は全く失はるべきである。)八には解脫魔網。菩薩諸の禪定を習へば、則ち能く生死一切の魔網を遠離し、惡く皆纏縛し得ざらしむるので、これを解脫魔網といふ。九には安住佛境。菩薩諸の禪定を習へば、無量の智慧を開發し、甚深の法義に通達し、佛知見に於て自然に明かにして、心々寂滅して不動に住持すること

が出来、これを安住佛境といふ。十には解脫成熟。菩薩諸の禪定を習へば一切の惑業撓亂すること能はず、之を行じて既に久しければ無碍解脫自然に圓熟する、これを解脫成熟といふ。

第六には般若波羅蜜である。般若を譯して智慧といふ。一切諸法に通達し、惑を斷じ理を證し、諸の衆生の爲に種々に演說することである。更に分つていへば俗諦を知るを智といひ、眞諦を知るを慧といふのであるが、通じては一である。智度論に云く、「忍鎧の心堅固にして、精進の弓力強く、智慧の箭勁利にして、憍慢の諸賊を破す」とある。衆生の煩惱を破し佛道に入らしむるの力が智慧に具はれることを稱するのである。又此の般若波羅蜜を分てば、此中に四波羅蜜がある。一には方便善巧波羅蜜。一切衆生を化導するに、よく其の機根に應じ方便を以て巧説し、悉く道に入らしむるをいふ。二には願波羅蜜。固く心に期して満足を志求するを願といふの

で、願に二つある。一、求菩提願と利樂他願とである。前者は己を完うするの願で、後者は他を濟ふの願である。三には力波羅蜜。之を分てば修習力と思擇力との二となる。四には智波羅蜜。之を分てば受用法樂智と成熟有情智の二となる。受用法樂とは眞理を究め盡して惑無きに至れるをいふ。成熟有情とは一切衆生を教化して佛乘に歸入せしむるをいふ。有情とは一切衆生のことである。

此の六波羅蜜によつて菩薩はよく自利利他の大行を成就し、涅槃の彼岸に到り得べきが故に、「六度は一切の行を攝す」(仁王經)ともいふのである。若し能く正法を攝受するものは、六度の行自ら具はる故に、「攝受正法は即ち是れ波羅蜜」といふのである。

餘論 (十二)

佛法僧を三寶といひ、王者を并せ尊ぶのは、三者の一を廢すべからざるが故である。佛の世に出られたのは法を説きたまはんが爲である。法が世に弘まらぬならば、たとへ佛が出現したまふとも、吾等衆生の爲には佛の出たまはざると異なる所は無い。佛の世に在す間は限りがあるけれども、法の流布することは限り無き故に、吾等衆生は永く佛の恩に浴し得べきである。法の世に弘まるとは之を弘むる人の力に依る。協心和合して佛に仕へ法を弘むる者を僧といふ。されば僧は法を弘め、佛の恩を永く吾等に傳ふる者で、若し斯く法を弘むる者が無ければ法有りと雖り宛も法無きに同じきものである。是を以て佛と法と僧と并せ尊んで三寶とするのである。實性論には「眞實は世に希有なり、明淨にして勢力あり、能く世間を莊嚴し、最上なり、不變なり」とある。是れ佛法僧の尊むべき所以を悉せるに庶幾きものである。

斯く法は人を得て弘まり、人は法によつて覺を得るが故に、法と人とは二にして而も二ならずといはなければならぬ。人無ければ法ありと雖も世に行はれず、行はれざれば無しといふも可である。法無ければ人ありと雖も人たる所以を全うすることが出来ぬ。人にして人たらざれば、人無しといふも可である。今攝受正法は即ち攝受正法の人なり、二者更に別なしといふのは即ち此の意である。佛は人の爲に法を惜みたまはず。人々自ら力を致すこと足らざるが故に、佛の法を得られぬのである。佛の之を秘したまふに非ず、人の之を求むることの足らぬのである。涅槃經の中に、佛が迦葉に示したまへる所は、尤も吾等の心に銘すべきものである。經にいはく。

「その時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、世尊、佛の所説の如くば、諸佛世尊には秘密の藏ありと。是の義然らず。何を以ての故ぞ、諸佛世尊には唯だ密

語有るのみにして、密藏有ること無きなり。譬へば幻主の木人を機關するが如きは、人その屈伸俯仰を親見すと雖も、内に之をして然らしむるものあるを知ることを莫し。佛法は爾らず。咸衆生をして悉く知見することを得せしむるものなり。云何ぞ諸佛世尊には秘密の藏ありと言ふべき。佛迦葉を讚めたまはく、善哉善哉、善男子、汝が言ふ所の如し。如來實には秘密の藏無きなり。何を以ての故ぞ、秋の満月の空に處して、顯露清淨にして翳無く、人皆親見するが如く、如來の言も亦た復た是の如し。開發顯露し清淨にして翳無きなり。愚人は解せず、之を秘藏と謂ふ。智者了達すれば則ち藏と名けず。」

此の經に説かるゝ所は尤も深く味はなければならぬことである。佛の説きたまふ所は意極めて深く、而も一々吾等の身に適切である。然るに淺く之を解する者は、その意の在る所を詳にせぬ故に、之を尊重し敬仰して、永

く受持せんとの念を發することは出來ぬ。されば之に對して佛語の甚深微妙なることを説き、其の尤も重んずべく尊むべき所以を辨へしむることが必要である。是れ諸佛には秘密の藏ありといふ教の生ずる所以である。しかし是れは獨り淺識の者の爲にいふので、眞の佛意に於ては決して特に秘密の藏を作つて、吾等に示すことを惜みたまふことはない。其の語に含まるゝ所が極めて深奥にして、容易く解すべからざる故に「密語有り」といふけれども、其の意に於ては特に吾等に秘したまふ所があるのではない故に「密藏あること無し」といふのである。彼の木偶を操つて人に示す者は、人が其の機關を窺ひ知らんことを恐れ、之を深く秘するのである。佛は之に異り、人が佛の眞意を辨へ知るの遅からんことを恐れたまふのみである。されば佛には秘したまふ所も無く、惜みたまふ所も無い。佛の法を稱して「秋の満月の空に處して顯露清淨にして翳無く、人皆觀見するが如し」とい

ふは、是れ即ち佛の本意である。故に吾等は淺く佛の語を解して其の眞意を失はんことを戒め、尤も慎重にしなければならぬが、自ら力を用ゆること久しきに及べば必ず佛の眞實の意を究め得べきことを信すべきである。何人と雖も正法を攝受して懈怠無きに於ては、漸く佛の知見を辨へ、佛と法とに配して三寶の一たるべき地位に進み得べき者である。法華經には「是の人は一切世間の瞻奉すべき所なり」とある。また「則ち如來の使なり、如來の所遣として如來の事を行ずるなり」ともある。大に勤め勵むべきではないか。

餘論 (十三)

正法を攝受する者は、身と命と及び財とを惜むことは無い。是れ身と命と財とよりも勝れるものあるを信ずること深くして且至れるが故である。

前に引いた無量義經の中に釋尊の勤行を頌して、「能く一切の諸の捨て難き財寶妻子及び國城を捨て、法の内外に於て憍む所無く、頭目髓腦悉く人に施したまへり」とあるは、財を捨つるを頌し奉るのである。「諸佛の清淨の禁を奉持して乃至命を失へども毀傷したまはず」とあるは、命を捨つるの義であつて、「若し人刀杖をもて來て害を加へ惡口罵辱すれども終に瞋りたまはず、劫を歴て身を挫けども倦惰したまはず」とあるは、則ち身を捨つるの義である。そこで併せて之を頌して「能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依し奉る」といふのである。

釋尊の前身、檀王たりし時には財を惜まざりし身を惜まざりして法を求められた。「布施を勤行せしに、心に象馬七珍國城妻子、奴婢僕從、頭目髓腦、身肉手足を憍惜すること無く、軀命をも惜まざりき。……法の爲の故に國位を捐捨して政を太子に委し、鼓を撃ち四方に宣令して法を求めき」とある。又阿私

仙人に仕へて法を求めたまへる際の事を「即ち仙人に隨て所須を供給し、果を採り水を汲み、薪を拾ひ食を設け、乃至は身を以て牀座と作せしに、身心倦むこと無かりき」とある。(法華經提婆品)是れ財を惜まざりし身を惜まざるの範である。又同じく釋尊の前身、雪山童子たりし時、帝釋が身を鬼と變じて現はれ「諸行無常、是生滅法」と半偈を説いたのを聞いて、残れる半偈を聞かんが爲に、身を以て鬼の食と爲さんことを約し、「生滅々已、寂滅爲樂」と説き終るを聞いて身を鬼の口に投ぜられた。「我此偈を聞き已りて、若くは石、若くは壁、若くは樹、若くは道に於て此偈を書寫し、即時に高樹の上に昇りて身を地に投ず。爾時に羅刹、帝釋の形に復して吾が身を接收す」とある。其偈を石樹等に書かれたのは、此處を通り過ぐる人に示して覺を得せしめんととの慈悲心に出たのである。是れ命を惜まざるの範といふべきである。(涅槃經、十四)大乘の教を行ずる者は共に釋尊の遺したまへる範に従ひ、身命

と財とを惜まざるべきである。吾等の現世に於て享け得たる身と命とは有限である。されど吾等の眞身は佛と同じく不變常住である。永恆不壞である。而も吾等は煩惱に蔽はるゝが故に自ら之を覺知せぬので、自ら覺知しなければ自ら之を有せぬと異なる所はない。若し能く正法を攝受するによつて、身命と財とを惜まざるに至れば、有限なる何物にも囚はるゝ所なきが故に、即ち常住なる生を得ると共に、無量の功德も自ら具はるべきである。何となれば斯る境界に到達すると共に一切衆生を教化すべき力が自ら身に具はるべき故である。斯くて一切衆生の共に瞻仰する所となるならば、是れ有限の財を捨て無限の財を得たる者である。七寶を以て身を飾るも、是れたゞ有限の生に於て眼を樂ますに過ぎぬ、眞の莊嚴は之と異なるものである。涅槃經には「二種の莊嚴あり、一は智慧なり、一は福德なり。若し菩薩有りて是の如き二種の莊

嚴を具足する者は、則ち佛性を知るものなり」といつてある。攝受正法の人の到達し得べき所の境は即ち此に外ならぬのである。

餘論 (十四)

佛の世に出たまひて後、正法、像法、末法の三時が相續するのである。仁王經疏には「教有り、行有り、證果を得る有るを名けて正法とす。教有り、行有りて而して果證無きを名けて像法とす。唯だ其の教有りて行無く證無きを名けて末法とす」とある。教とは佛の遺したまへる教である。行とは教を信ずる者の實行すべき儀範である。證果とは其の教を信じ其の行を積むによつて自ら心に悟る所あり、徳を成ずることである。三大部輔註には「正とは證なり、像とは似たるなり、末とは微なるなり」とある。釋尊入滅後一千年は正法の世、其後一千年は像法の世にして、二千年の後を末法の世と

いふ。末法の世は萬年である。(大悲經に依る)

又佛滅後に於て五箇の五百年を分つことは大集經に基くのである。一には解脱堅固の世、二には禪定堅固の世、三には讀誦多聞堅固の世、四には多造塔寺堅固の世、五には闍諍堅固の世である。堅固とは必ず行はれて違ふこと無きの義である。

第一の五百年間は正法よく行はれ解脱を得る者多き故に、解脱堅固の世といふ。第二の五百年に至れば解脱を得ること漸く難きに至り、自ら禪定を求めて觀念工夫に力を盡すものが多いので、これを禪定堅固の世といふ。(以上併せて一千年、正法の時である。)第三の五百年に至れば實行漸く廢れて研究のみが勢を得、人々皆博く讀み多く聞くことを競ふによつて、之を讀誦多聞堅固の世といふ。第四の五百年に及んでは、佛法たゞ其の形をのみ存し、たゞ塔寺の建立のみが盛なる故に、之を多造塔寺堅固の世といふ。(以

上併せて一千年、像法の時で、此より後を末法の世といふ。)第五の五百年は教學已に廢し、人々たゞ闍諍を事として邪見を増長せしむるのみで、之を闍諍堅固の時といふ、即ち末法の初である。又此の時を白法隱沒の時といふ。白を以て正に比し、黒を以て邪に比するので、正法世に行はれずして邪法勢を得る故に、名けて白法隱沒の時といふのである。末法に及んで佛法世に廢れたるに似たれど、佛の威徳の全く滅すべきやうは無い。時窮まりて、興隆の運また動くのである。

法は貴しと雖も、之を弘むる者なければ世に弘まらぬ。之を弘むる者ありと雖も、世の人の之を求むる無ければ、また弘まらぬ。時已に末法に入つて白法隱沒し、人々たゞ紛争を事として專日なきに至れば、漸くにして人々の心に斯る苦を脱せんとするの念を長じ來り、再び正法を求むるの機運がこゝに動くのである。此の機運に應じて起ち、正法の弘通に力を用ゆるも

のは法華經に所謂「如來の使」にして、眞に法師たるの名に耻ぢざる者である。法師たる者は斯の如くに重大なる任を負へる者なるが故に、常に自ら戒めて苟くも佛意に違はざらんことを念としなければならぬ。「不誚曲不欺誑、不幻偽を以て正法を受樂し」云々とあるのは即ち之が爲である。

智度論には比丘の五邪命をあげて固く之を禁じてある。その精神は本經に擧げらるゝ所と一であるけれども、説いて更にその委曲を盡せるの觀がある。所謂五邪命の第一は詐りて異相を現ずることである。世俗の面目を幻惑すべき不思議の事を現じて、自己の利益を求むるの資とするをいふ。二には自ら功能を説くことである。他の歸依を得んがために自ら己の功德を説くのは、たとへ事實を説くものと雖も猶ほ罪とすべきである。況んや不實の事を誇説する者に至ては大罪といふべきである。三には吉凶を占相することである。占トを學んで人の吉凶を語り、之によつて利養を

求むるは、比丘の爲すべきことではない。之によつて人々をして勤勉の風を失はしむるの害は尤も大である。四には聲を高くして威を現ずることである。比丘はたゞ己が行の足らざらんことを恐るべきである。而るを大言壯語して自己の威徳を飾るが如きは尤も卑むべき事といはなければならぬ。五には所得の利を説いて以て人心を動すことである。即ち信によつて利益を得たる人の事跡を誇説して、以て自己の功德を世に示さんとするので、是れは公明なる心事とはいはれぬ。以上五邪命中に擧げらるゝ所は共に末世の法師に適切である。斯る邪行を脱し盡せるものでなければ、能く如來の使として世に立ち、末世濁惡の衆生を覺醒し、共に佛道に入らしむることの出來やう筈はない。

餘論 (十五)

魔とは梵語摩羅マラの略で、譯しては能奪命といひ、また障礙ともいふ。婆沙論には「何の故に魔と名く。曰く、慧命を斷つが故に魔と名く、また常に放逸を行ひ自身を害するが故に魔と名く」とある。慧命を絶つとは智慧を絶滅せしむるの謂である。欲界第六天の主を魔王といひ、其の眷屬を魔民魔人といふ。此等の諸魔は皆大威力あつて、世の法を修むる者に對して難を爲し、其の行を妨ぐるにより、轉じては凡て行を妨ぐべき力を魔と稱するに至つたのである。例へば、華嚴經には十魔を擧げてある。一には蘊魔二には煩惱魔、三には業魔、四には心魔、五には死魔、六には天魔、七には善根魔、八には三昧魔、九には善知識魔、十には善提法智魔である。一に蘊魔とは五蘊が障を爲して、佛道を行じ得ざることである。五蘊とは即ち吾等の身心のこと、身心一切の作用によつて遮ぎられ、道を行ずるの力が緩む故に之を呼んで魔といふのである。二に煩惱魔とは吾等の心に起り來る貪瞋痴慢

等の煩惱が吾等の道を行ずる障を爲す故に、之を呼んで魔といふのである。三に業魔とは殺生偷盜等の惡業が障を爲して道を行ずるを妨ぐる故に、之を呼んで魔といふのである。四に心魔とは我に執着するの心が正道の障を爲すのをいふのである。五に死魔とは人の壽命に限りあるが爲に道を修すること全きを得ぬのをいふのである。六に天魔とは彼の魔王魔民等の人に害を爲す者といふのである。七に善根魔とは自ら善根を積み得たりとの念が障を爲すのである。自ら善根に誇るの心が一たび生ずれば道を求むるの念は即ち失はれる。故に之を呼んで魔と爲するのである。八に三昧魔とは自ら禪定三昧を得たるに安んじて、更に進んで道を求めんとするの念の無い者で、其の三昧が障を爲す故に之を呼んで魔といふのである。九に善知識魔とは人に教ふるを惜む者をいふ。善知識とは即ち師のことである。人の師となつては慳吝する所なく己の知つた所を悉く人に

傳へ、共に菩提を成ぜんことを期すべきである。然るに之を惜んで傳へざれば道に入るの障を爲すのである。十に菩提法智魔とは自ら正智を解し得たりと信じ、之に執著するが故に、佛に近づき得べくして而も終に近づき得ぬのである。即ち其の智が却て魔障となる者である。

魔を治するの法には、經を講じ呪を誦する等種々の儀式があるけれども、詮ずる所各自の心に隙あるが故に魔の乘ずる所となるのである。摩訶止觀に、佛を念ずるを以て魔を治することを説いてあるが、是れが根本である。淨土修證儀に「清淨の功德を以て境と爲すが故に永く魔事を絶す、心に邪念なき時は則ち聖境現前し光明發顯す」とあるは、よく此の意を明にしたものである。今此經に「少しく正法を攝受すれば魔をして苦惱せしむ」とあるは其の謂ありといふべきである。蓋し大乘の教は菩薩の行を教ふるものである。菩薩の行は佛の大慈悲を賛^{サシ}けて一切衆生を濟ふを以て所詮

とする。此の心は一切衆生に障を爲さんとする魔の心と、正しく相反せるものである。夫れ火を滅せんとするには水よりも善いものはない。魔を掃はんとするには慈悲の行を以てするに勝れるものはない。若し初めより身命財を捨つるの念を以て大乘を修するものは、一切の善根に勝れるの功德を具へてゐる。斯の如くにして世に立ち人に對するならば何者が能く之に敵することが出来やう。諺に所謂仁者に敵なしといふのも實に斯の如き人のことである。

餘論 (十六)

佛の所謂「計我著相の者」(梵經)は即ち凡夫である。是れはたゞ一身の利害を計つて他を知らず、たゞ眼前の事相に執著して此を出ること能はざる者である。其の佛菩薩の境界を去ること遠きや言ふを俟たぬ所であ

る。佛の所謂「滅盡取證の者」(梵網經)は即ち聲聞と縁覺とである。是れは我を滅し著を離れ得たる者で、迥かに凡夫の上に出て居る。されども慈悲の心缺けたるの故を以て佛が之を斥けたまへること前に擧げた如くである。然れども聲聞には聲聞の覺あり、縁覺には縁覺の覺あり、何れも共に涅槃を得たりとして自ら安んじて居るのである。獨り自ら安んぜるのみならず、佛もまた之に對して其の涅槃を究竟せることを許されたので、是れ佛の方便である。

法華經の化城諭品には此の意を示さるゝこと尤も懇である。「世間に二乘にして滅度を得るもの無し、唯だ一佛乘をもて滅度を得るのみ。比丘當に知るべし、如來の方便は深く衆生の性に入れり。其の小法を志樂して深く五欲に著するを知つて、是等の爲の故に涅槃を説く。是の人若し聞けば則ち信受す」と而して更に譬喩を設けて此の意を敷衍してある。譬へば

五百由旬の險難なる惡道あり、多人衆相伴つて此を越えんをするのであるが、此の人衆を率ゐたる導師は聰慧明達にして、此の險路を越え行けば、必ず珍寶を得らるべき地に到達すべきことを知つて居る。然るに衆は皆中路にして懈退し、導師に向つて「我等疲極まりてまた怖畏す、前路は猶ほ遠し、今退き還らんと欲す」と迫つて止まぬ。導師之を聞いて獨り思ふに「此等まことに惑むべし、如何ぞ大珍寶を捨て退き還らんとは欲する」と。乃ち方便力を以て此の險道の中に一の大城を幻出せしめ、衆人に告げて、「汝等怖るゝこと勿れ、若し是の城に入りなば快く安穩なることを得ん」といつた。衆人は此の化城の中に入つて疲を忘れ、心大に歡喜を覺えた。導師は衆人が止息を得て疲倦の念の無きに至れるを見て、即ち化城を滅し、之に語つて、「汝等いざ共に往かん、寶處は近きに在り。彼の大城は我が化作せる所にして暫く止息せんが爲のみ」といつた。

若し初めより一佛乗のみを説かれたならば、衆生は佛道に入らんと志を立つること無く、「佛道は長遠なり、久しく勤苦を受けて乃ち成ずることを得べし」とて、怯懦の念に制せられて、永く凡夫の境を離るゝことが出来ぬであらう。佛は彼等の心の斯く怯弱下劣なるを知りたまへるが故に、方便力を以て、中道に於て止息せんが爲に二乗の涅槃を説かれたのである。而して二乗の涅槃に住して自ら安んずるに及んでは、佛更に之に對して「汝等は所作未だ辨ぜず。汝が所住の地は佛慧に近し、當に觀察籌量すべし。所得の涅槃は眞實にあらず、但だ是れ如來の方便の力をもて、一佛乗に於て分別して三と説けるのみ」と教へられた。

此は化城諭品に示さるゝ所であるが、「汝が所住の地は佛慧に近し」の語を尤も深く味はなければならぬ。聲聞緣覺は佛慧に近きものである、故に更に一層の努力を積むに於ては、必ず作佛することを得べきである。さ

れど如何に近しと雖も、更に努むること無ければ、永く之に到達し得らるべくもない。其の聲聞たり緣覺たるを得るまでに積み來れる所の努力は決して軽いものではない。此等の努力は少しも空に歸するものではなく、更に菩薩の修行を積み佛慧を成就するにつきては、以前の努力がその基礎となるものであるから、「大乘によつて増長することを得」といふのである。若し菩薩の行に進むことを爲さぬならば、其の聲聞若くは緣覺として積める所の努力は殆んど空に歸すべきである。何となれば聲聞若くは緣覺にして止まる者は永く佛と成ることが出来ぬからである。

是故に佛は舍利弗に向つて、「若し我が弟子自ら阿羅漢なり辟支佛なりと謂ひて、諸佛如來の但だ菩薩を教化したまふ事を聞かず知らざらんは、此れ佛弟子にあらず、阿羅漢にあらず、辟支佛にあらず。又舍利弗是の諸の比丘比丘尼自ら已に阿羅漢を得たり、是れ最後身なり、究竟の涅槃なり」と謂ひ

て便ち復た阿耨多羅三藐三菩提を志求せずんば、當に知るべし此輩は皆是れ増上慢の人なり」と告げられたのである。(法華經方便品に出づ)

餘論 (十七)

梵網經には、「計我著相の者は是の法を信ずること能はず、滅盡取證の者は亦た下種の處に非ず。……是故に諸の佛子、宜しく大勇猛を發すべし諸佛の淨戒に於て護持すること明珠の如くせよ。過去の諸の菩薩已に是の中に於て學しき、未來の者も當に學すべし、現在の者も今學す。此は是れ佛の行處なり、聖主の稱歎したまふ所なり」とある。戒は是れ菩薩をして共に佛とならしむるが爲に、尤も重要なものである。能く戒を持つものは其の徳自ら他を化すべきが故に、「戒香」の語あり、觀無量壽經には、「戒香薰修す」とある。また戒香經には、「世間所有の諸の華香、乃至沈檀龍麝香

是の如き等の香は徧く聞くものにあらず。唯だ戒香の一切に徧きを聞く」とある。

波羅提木叉を譯して「處々解脱」といふ。義林章に「戒は即ち解脱なり、惡を解脱するが故に」とあるので其意最も明である。毘尼または毘奈耶ともいふ譯して律といひ、また調伏ともいふ。探玄記には、「毘奈耶を此に調伏と云ふ。調とは和御なり、伏とは制滅なり。身語等の業を調和控御して、諸の惡行を制伏除滅するが故に」とある。即ち波羅提木叉といひ、若くは毘尼といふも其の意相異なること無きを知るべきである。

而して男女の出家して佛に仕ふる者、即ち比丘と比丘尼は具足戒を受くるを通軌とする。具足とは大小各種の過失を防止するに於て缺くる所無きが故に名くるのである。具足戒は比丘に二百五十戒あり、比丘尼に五百戒ある。但し比丘尼の戒は比丘に倍するといふ意を以て五百と稱するの

みて、實は三百四十八戒である。更に之を科に分つと次の如くである。

- 四波羅夷（四波羅夷）
- 十三僧殘（十三僧殘）
- 二不定（二不定）
- 三十捨墮（三十捨墮）
- 九十波逸提（九十波逸提）
- 四提舍尼（四提舍尼）
- 百衆學（百衆學）
- 七滅諍（七滅諍）
- 八波羅夷（八波羅夷）
- 十七僧殘（十七僧殘）
- 三十捨墮（三十捨墮）

比丘二百五十戒

比丘人比丘尼五百戒、百七十八波逸提

實は三百四十八提舍尼

百衆學

七滅諍

自波羅夷とは譯して棄といふ、諸罪中の大罪にして之を犯す者は僧中より棄てらるゝを以て棄と名くるのである。比丘の四波羅夷とは、一に姦戒、二に盜戒、三に殺人戒、四に大妄語戒である。比丘尼の波羅夷は此の四に加ふるに更に四事を以てしてある。即ち五には摩觸戒、男子の身に觸れて愛着を感ずるをいふ。六には八事成重戒、自ら染汗心あり、男子の染汗心あるを知りて彼が手を捉り（一）衣を捉るを聽し（二）共に屏處に入り（三）屏處に於て共に立ち（四）共に語り（五）共に行き（六）身相倚り（七）共に嬌事を行ひ得べき處に行くを期す、此の八事を犯すをいふ。

僧殘とは波羅夷に次げる重罪である。之を犯して後大衆の中に於て懺悔すれば、纒かによく僧の中に残り止ることを得るものである。比丘の僧殘に十三あり。一には故漏失戒、故意を以て隱處を弄して精を漏失するをいふ。二には摩觸戒、染汗の心を以て女人の身に觸るゝをいふ。三には露語戒、染汗の心を以て女人と放逸の語を交ゆるをいふ。四には歎身索供養戒、染汗の心を以て自身を歎美し、女人を惑はして其の供養を求むるをいふ。五には媒嫁戒、他人の淫行を媒介するをいふ。六には僧不處分過量造房戒、自己の僧房を作るに其の處を擇まず、分に過ぎたる廣大のものを建つるをいふ。七には有主不處分造房戒、人の布施を得て僧房を作る時、其の處を擇ぶに他人の意見を求めず、自己の私見にのみよつて定むるをいふ。八には無根謗戒、無根の言を以て他を非謗するをいふ。九には假根謗戒、推測を以て他人の惡事を假定して之を謗るをいふ。十には破僧違諫戒、和合僧を破

らんとして(比丘の相集り、心を同うして佛事を行ずるを稱して僧伽といふ)他の諫戒に従はぬをいふ。十一には助破違諫戒、他の和合僧を破るに助勢して諫戒に従はぬをいふ。十二には謗僧違諫戒、他より諫戒を受けて却て之を恨み、其の人の過をあげて之を謗るをいふ。十三には惡性拒僧違諫戒、他の諫戒を聞いて怒を發し、之を拒斥するをいふ。

次に比丘尼の十七僧殘は、一に媒嫁戒、二に無根謗戒、三に假根謗戒、みな比丘のと同じ。四に言人戒、人を官に訴へて曲直を争ふをいふ。五に度賊女戒、重罪の女を妄りに出家せしむるをいふ。六に界外輒解三舉戒、罪によつて排除せられたる尼を(これとていふ)恣に其罪を解き戒を授くるをいふ。七に四獨戒、獨り河を渡り、獨り村に入り、獨り宿し、獨り後に在りて行くをいふ。八に受漏心男食戒、汚れたる心の男子より食を受くるをいふ。九に勸受染心男子衣食戒、他に勸めて汚れたる心の男子より衣食を受けしむるをいふ。

十に破僧違諫戒、十一に助破違諫戒、十二に謗僧違諫戒、十三に惡性拒僧違諫戒、いづれも比丘のと同じ。十四に習近住違諫戒、親しき比丘尼と共に法に違へる行を爲し、諫められても猶ほ改めぬをいふ。十五に謗僧勸習近住違諫戒、他の比丘尼が違法の行を爲して諫戒を受けたのを、却て其の諫めた者を謗つて、非行を遂げんことを勸むるをいふ。十六に瞋心捨三寶違僧三諫戒、自ら瞋恚を起して三寶に背き、他の同輩の諫むること三たびに及んでも之に順はぬをいふ。十七に發起四諍謗僧違諫戒、鬪諍を好み、他の僧に愛と恚と怖と痴との四失ありと誹謗し、同輩に諫められても之に順はぬをいふ。次に捨墮とは多く財物に關する罪である。財を捨て罪を懺悔するを要するが故に捨ていひ、若し懺悔せざれば三惡道に墮すべき故に墮といふ。次に波逸提とは譯して墮といひ、又前の捨墮と區別する爲に單墮といふ。同じく三惡道に墮すべき罪の義である。次に提舍尼は譯して向彼悔とい

ふ。彼とは大徳ある人の義で、即ち大徳ある人に向つて懺悔し以て罪を滅すべきの意である。次に衆學とは輕罪にして何人も犯し易きもの故に常に、念じ學して犯さざらんことを期すべしとの義である。次に滅諍とは戒を持つことによつて滅し得べき諍鬪の行をいふ。此等は何れも前の波羅夷及び僧殘に比すれば輕罪である。今その目を略して一々は擧げぬ。又比丘に不定といふ戒がある。これは波羅夷若くは僧殘中に屬すべきか或は捨墮に屬すべきか不定なる罪である。

斯の如くに戒を立つること微細に亘つて居る。が、要するに出家の本意を全うせんが爲に外ならぬものである。而して大乘の教に入り菩薩の行を積み、佛智を成就することを得て、初めて出家の功德を全うし得るものなり。大乘を離れて佛乘なく、聲聞乘なく、また緣覺乘なしといふの意は、以て推知すべきである。

餘論 (十八)

佛の教を説きたまへるは拔苦與樂のためである。拔苦とは吾等が苦の本を抜くのである、與樂とは吾等に眞の樂を與ふるのである。吾等の自ら以て樂と爲す所は眞の樂でない。「三界は安きこと無く猶ほ火宅の如し、衆苦充滿して甚だ怖畏す可し、常に生老病死の憂患有り」とは法華經譬諭品に示さるゝ所である。而して此の譬諭品に於ては、吾等が此の中に在つて名利を追ひて飽くことを知らぬのを、幼兒が火焰に包まれたる家の中に在つて嬉戲するに譬へ、其の父なる長者が方便を設けて諸子を火中より救へるを以て佛の説法に比してある。經に云く、

「是時に長者是の念を作さく、諸子此の如くにして我が愁惱を益す。今此の舍宅は一も樂む可きもの無し、而るに諸子等嬉戲に耽溺して我が教を受

けず、將に火に害せられんとすと、即ち思惟して諸の方便を設け、諸子等に告ぐ、我に種々の珍玩の具妙寶の好車あり、羊車鹿車と大牛の車なり、今門外に在り。汝等出て來れ、吾汝等が爲に此の車を造作せし、意の樂む所に隨ひて以て遊戯す可しと。諸子此の如き諸の車を説くを聞きて、即時に奔競し馳走して出て空地に到り、諸の苦難を離れぬ。長者子の火宅を出ることを得て四衢に住するを見て、師子の座に坐して自ら慶んで言く、我今快樂なり此の諸子等は生育すること甚だ難し、愚小無知にして險宅に入れり。諸の毒蟲魍魎多くして畏る可し、大火猛焰四面より俱に起れり。而るに此の諸子嬉戲に貪樂せり、我已に之を救ひて難を脱るゝことを得しめつ。是故に諸人我今快樂なりと。爾時に諸子、父の安坐せるを知り、皆父の所に詣り、父に白して言さく、願ふは我等に三種の寶車を賜へ。前に許さるゝが如くは諸子出て來れ、當に三車を以て汝が欲する所に隨ふべしと。今正しく是れ

時なり、唯だ給與を垂れたまへと。長者は大に富んで庫藏衆多なり、金銀瑠璃磚磈碼碯あり。衆の寶物を以て諸の大車を造れり。莊校嚴飾し周匝の欄楯あり、四面に鈴を懸け、金繩絞絡して眞珠の羅網其上に張り施し、金華の諸纓處々に垂れ下せり。衆綵雜飾し周匝圍繞せり、柔輓の繒纒以て茵蔕と爲し、上妙の細氈價直千億にして鮮白淨潔なるを以て其上を覆へり。大白牛有り、肥壯多力にして形體殊好なるを以て寶車に駕せり。諸の僮從多くして之を侍衛せり。是の妙車を以て等しく諸子に賜ふ。諸子は是の時に歡喜踊躍して是の寶車に乗じて四方に遊び、嬉戲快樂して自在無碍なり」と。夫れ佛陀は此の長者の如く、衆生をして火厄の苦を脱せしめたるを以て快樂とせらるゝのである。而もたゞ衆生をして火厄を脱せしめたるのみならず、之に大白牛車を賜へるが故に、之に乗じて四方に遊ぶことを得たるものは、自在無碍にして佛陀の如くに快樂である。此の大白牛車とは即ち

大乘の教のことである。大乘を修するものは即ち菩薩である。「諸佛世尊は方便を以てすと雖も、所化の衆生は皆是れ菩薩なり」といふのは此意である。されば吾等が佛に従ひて快樂を得んためには、必ずや菩薩の道を行ぜなければならぬ。若したゞ火厄を脱し得たるのみにして、大白牛車に乗ずること無くば、何ぞ自在無碍の樂を得られやう。「阿羅漢には究竟の樂なし」と本經に説かれたのは、其の謂ありといふべきである。

菩薩は慈悲の念を以て衆生に接するものである。仁王經等に四無量心を説いてある。四無量心とは一に慈無量心、一切衆生に樂を與へんことを念とし力を惜まぬことである。二に悲無量心、一切衆生の苦を抜かんことを念とし努めて止まぬことである。三に喜無量心、一切衆生の苦を脱し樂を得たるについて無限の喜悅を感ずるのである。四に捨無量心、恩怨の私情を捨て、一切衆生を等しく利益せんことを念とするのである。斯の如く

にして初めて眞の菩薩道を行ずるものといふべきで、これは彼の小乗の徒の窺ひ能はざる所である。

菩薩の行を修する者は一切の順境と逆境とに於て共に能く慈と忍とを失はぬ。月燈三昧經には慈忍の十利益を説く。即ち火も焼くこと能はず、刀も割くこと能はず、毒も中ること能はず、水も漂はすこと能はず、非人の爲に護られ、(非人とは鬼神をいふ、その形人の如く)身相莊嚴なり、諸惡道を閉ぢ(地獄、餓鬼、畜生等の惡道には永遠に墮すること)梵天を隨樂し、晝夜常に安く、喜樂を離れざるをいふのである。菩薩は常に一切衆生を利益することとを念と爲せば、世に處するに敵が無いのである。假令彼より敵を爲す者あるも、たゞ之を哀愍して憎惡せぬ故に、敵は終に敵とならぬのである。所謂「遊行して畏無きこと師子王の如く」(法華經、安樂行品に出づ)なるもの、實に其の慈悲心の致す所である。聲聞緣覺等はたとへ諸罪の垢を除き得たりとい

ふとも未だ能く菩薩の如くに一切衆生を包容するの念をもたぬ故に、其の心に安んずる所なく、恃む所が無い。其の得たりとする所の涅槃は眞の涅槃にあらず、菩薩よりして之を見れば、「涅槃界を去ること遠し」といはねばならぬのである。

餘論 (十九)

仁王經に「一切衆生、三界の煩惱の果報を斷じ盡せる者を名けて佛と爲す」とある。即ち佛とならぬ間は一切煩惱の果報を斷じ盡せる者にあらず、斷じ盡さざる所あれば未だ眞の涅槃を得たる者にあらずと知るべきである。華嚴經には「世尊の處座は譬へば虚空の如くにして一切處に徧し、又佛の師子の座は是れ法界に同し」とある。蓋し佛の智の到らざる所なく佛の徳の容れざるもの無きをいふのである。斯の如くにして初めて眞

の涅槃があるのである。佛を譯して「覺者」といふ。大乘義章には之を釋して、「覺に兩義あり、一には覺察を覺とす、人の賊を覺るが如し、二には覺悟を覺と名く、人の睡りて寤るが如し。覺察の覺は煩惱障に對す。煩惱侵害の事は賊の如し。唯だ聖のみ覺知して其が爲に害せられず、故に覺と名く。涅槃に云く、人の賊を覺りて賊の能く爲すこと無きが如く、佛も亦た是の如しと。覺悟の覺は其の知障に對す。無明昏寢の事は睡の如し。聖慧一たび起りて朗然として大悟すれば、睡の寤るを得たるが如し、故に名けて覺と爲す、既に能く自ら覺り、復た能く他を覺らしめ、覺行窮滿す、故に名けて佛とす。其の自ら覺るは凡夫に異り、他を覺らしむるは二乘に異り、覺行窮滿せるは菩薩に異れり」とある。佛道に入れる者の一切の努力は、斯る境界に達せんことを理想とするものでなければならぬ。

此の理想を以て佛の大乘の教を究むるものは即ち菩薩である。「若し衆

生有り、佛世尊に従ひ法を聞きて信受し、勤修精進して一切智、佛智、自然智、無師智、如來の知見力、無所畏を求め、無量の衆生を愍念し、安樂にし、天人を利益し、一切を度脱せんとすれば、是を大乘と名く。菩薩は此の乘を求むるが故に名けて摩訶薩とす。〔法華經、譬喻品〕といへるは能く此の意を悉せるものである。摩訶とは大の義にして、薩とは衆生の義である。されば又菩薩を義譯して大士といふは即ち大心の衆生の義である。

されば涅槃經には菩薩が十法を修して能く涅槃を見ることを擧げてある。十法とは一に信心具足なり、二に淨戒具足なり、三に善知識に親近するなり、四に寂靜を樂ふなり、五に精進なり、六に念具足なり、七に輕語なり、八に護法なり、九に同行を供給するなり、十に智慧を具足するのである。一に信心具足とは菩薩の行を修するに先づ圓常正信の心を起し、一切法は皆是れ佛法なるを信じ、一切衆生に皆佛性有ることを信じ、如來の永く滅したまはざる

ことを信ずるのである。二に淨戒具足とは身心清淨にして禁戒を受持し、専ら佛果を成せんことを念とし、利養の爲にせず、乃至聲聞辟支佛たらんが爲にせず、最上第一義の爲に禁戒を護持するのである。三に善知識に親近すとは、諸の邪見の徒を遠離して偏に善友知識に親しみ、之に恭敬供養するをいふのである。四に寂靜を樂ふとは、諸の喧鬧を離れ澄神息慮して佛道を求め、身心共に寂靜なるを得て、よく諸法甚深の境界を觀察するをいふのである。五に精進とは、一心勇猛にして更に退失すること無く、心を專にして眞諦を觀ずるに當つて、たとへば頭上に火燃ゆるも終に放捨せざるが如くなるをいふのである。六に念具足とは修行に當つて佛を念じ法を念じ僧を念じ戒を念じ天を念じ捨を念ずる(捨を念ずるとは布施に堅各の念なからんを努むることである)をいふ。七に鞭語とは言を發すること誠諦にして調柔和美、常に諸の諛誑を離るるをいふ。八に護法とは、弘く正法を持ち

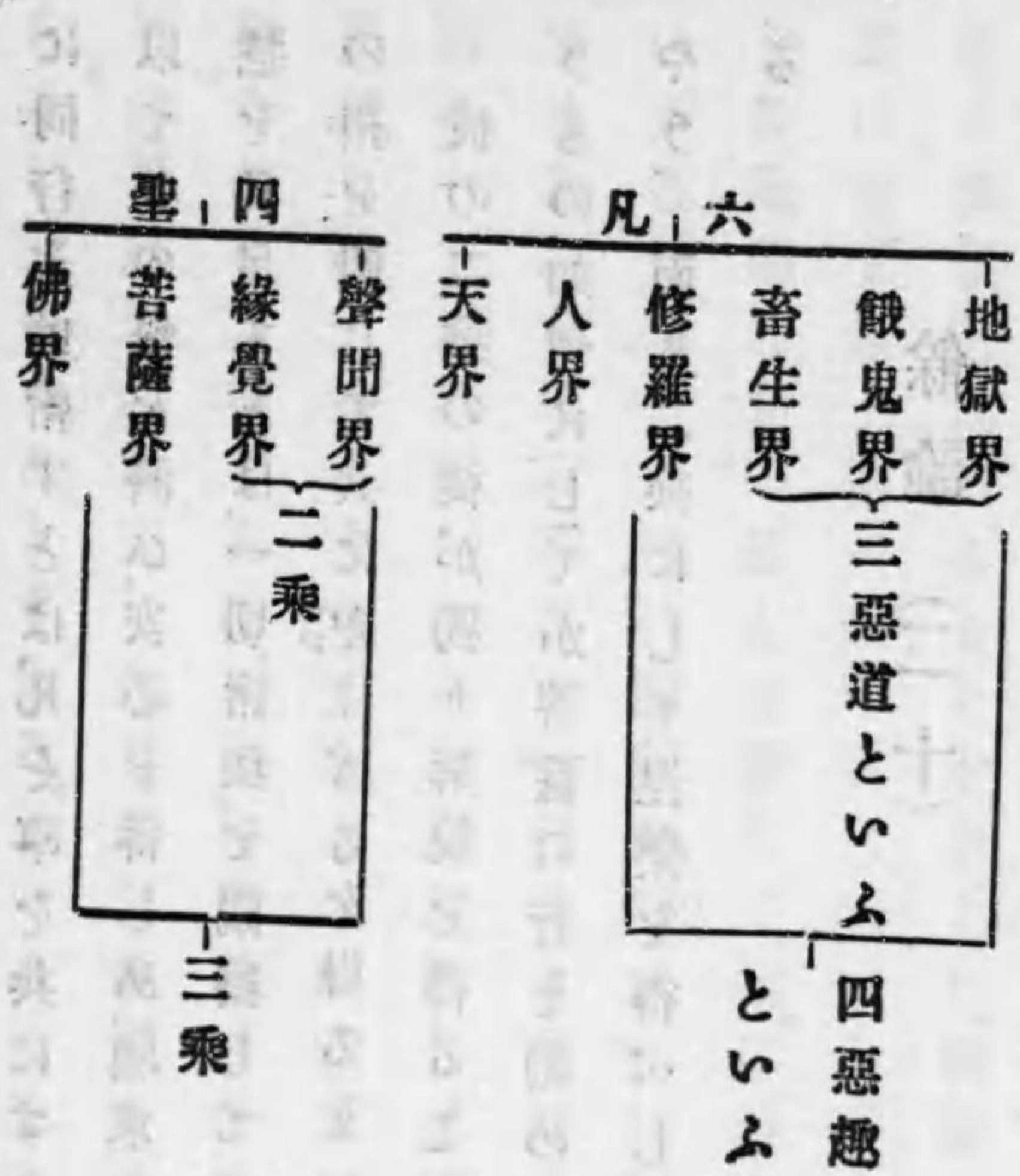
て、妙義を宣説し、展轉流布して佛種を斷たざらんことを努むるをいふ。九に同行を供給すとは、凡そ事を共にする者に不足有る時は己が有を推して以て其の無を濟ひ、安心を得しめ、馳求の患ひ無からしむるをいふ。十に智慧を具足すとは、一切諸法を觀察して悉く皆明了通達し、如來と一切衆生との相を觀じて共に差はざるを得るをいふのである。

彼の二乗の徒が獨り解脱を得ることを求めて佛の化導を贊くるに志無きもの、如何にしてか菩薩の行を勵める者と同じき功德を積むことが出来やう。而も二乗にして涅槃を得べしと説きたまへるは、是れ佛の方便である。

餘論 (二十一)

煩惱を斷てば即ち聖なり、煩惱に囚はるれば永く凡である。聖に四あり

凡に六あり併せて十界といふ。



人は以て聖なるべく、又以て凡にして終るべきものである。是れ其の一

念中に十界の性が皆併せ具はれるが故である。而も尋常の人に在つては佛性が具はつてゐても微にして力なく、徒に煩惱のみ累々として心に充ちてゐる。煩惱の類は極めて多いが、要を以て之を擧ぐるのにも諸説がある。唯識論には六大煩惱を説いてある。一には貪煩惱、染着するによつて苦を生ずるものである。二には瞋煩惱、憎恚するによつて不安を生じ悪行を生ずるものである。三には癡煩惱、諸の理事に迷闇なるによつて諸惑を生ずるのである。四には慢煩惱、己を恃んで高擧するによりて苦を生ずるのである。五には疑煩惱、諸の理に於て猶豫するによつて信心を妨ぐるものである。六には惡見煩惱、顛倒して推求するが故に善見を妨げて苦を生ずるのである。此の惡見を更に分てば身見、邊見、邪見、見取見、戒禁見の五となる。身見とは我を主とするの見である。邊見とは偏執の見である。邪見とは因果の理を無視して福を求むるのである。見取見とは自己の見を固執し

て敢て改めぬのである。戒禁見とは自己の立てたる戒禁の非理なるを顧みずして之に固執するのである。凡て此等の煩惱が錯綜糾紛して種々の悪業を生み、又種々の苦を生み來るのである。

而して諸煩惱の糾紛せる中に於て瞋恚の念が特に極端に増長せるものは其の報として地獄界に生じ、貪欲の念特に極端に増長せるものは、其の報として餓鬼界に生じ、愚癡の特に甚しき報としては畜生界に生じ、慢と疑との念が強ければ、其の報として修羅界に生ずるのである。此等の界には皆大なる苦がある。而して天界は獨り喜樂の念と歡喜の事とに充されたる所で、人界は彼の四惡趣と天界との中間に在る。善根を積めるものは其の報として生を天界に受け得べきである。然れども天界は猶ほ情を絶ち欲を絶ち得ざるが故に、其の歡樂の境に驕つてまた惡因を作るものは、更に他の界に生を受けなければならぬ。斯く善惡の業によつて以上六界に

交^{かは}る々々生を受くるを六道輪廻といふのである。若し善等各自の心上に就て觀ずれば、一日の中にも六道輪廻があり、一年の中にも六道輪廻がある。又無限の生を享くる間に於ても、六道に輪廻することを免れぬ。而して其の受くる所の形に醜好あり、其の境界に苦樂あり、其の壽命に長短あり、此れ皆其の前に積める所の業によつて定まれるものである。斯くして生死するを分段の生死と名くるのである。

斯く六道に輪廻する間に常住であると思つたことは、實には常住ならずして無常である。又悅樂ありと思つたことも、實には必ず苦を伴ふのである。又人々に不變の我があると思ふけれども、其の心は變動止まざる故に、眞に我といふべきものは無いのである。又自ら淨しと思つたことも、實には多くの染汗を帯びてゐる。斯く凡夫の有する常樂我淨の四見は、盡く頼むに足らざるものである。

佛の説きたまへる小乗の教によつて、此等四見の盡く頼むに足らぬことを諦め、心を此等に囚はるゝこと無きに至れるものを聲聞といふ。更に此の事を自ら遭遇する所の事物の縁によつて深く觀じ得たるものを縁覺といふ。此等は皆聖の流である。然れども小乗の教を以て覺を得たるものは佛と成ること能はざるが故に、此より更に進んで大乘を究め、菩薩の行を積まなければならぬ。菩薩は佛の化導を贊くべき者で、最も尊貴なる地位に在る。されど佛陀の境界に達し得ざる間は、未だ全く、惑を斷じ盡したりとはいはれぬ。たとへ世間の事物の爲に動搖せられて、貪瞋癡等の念を生ずることは無いとして、なほ未だ覺行の圓滿成就せるものではない。たとへ生死の累を脱し得たりとも、なほ其間に智の淺深あり、覺の高下あり、力の大小あること無限である。故に佛界に達せざる間の聖流にも、また生死があるといふのである。たとへ此の生死は六道の生死とは異り、その聲聞たり

縁覺たり菩薩たる地位の高下の變動に外ならぬものであるから之を稱して變易の生死といふのである。猶ほ其の修行によつて漸く佛智に近づき行く妙用は、凡夫の智を以て推度し難きものなるを以て、之を稱して不思議變易の生死ともいふのである。佛のみが眞によく生死の外に立ちたまふのである。佛に比ぶれば、何者も皆惑者である。故に菩薩は其の行愈々進み、其の智愈々深きに及んで、佛の及び難きを知ることが愈々切である。斯くして自ら慚愧して道を求むるの念愈々篤きが故に、能く勇猛精進して、後には終に佛身を成するのである。法華經に所謂「巨身にして大神通あり、智慧思議し、其の志念堅固にして大忍辱力有り、衆生の見んと樂ふ所」とは實に此等の菩薩の謂である。

餘論 (廿一)

無始の無明住地は是れ諸煩惱の因て生ずる所である。諸煩惱は断つべきも、無明住地は容易く断つべからず。是を以て人々は佛性を具しつゝも、佛と成る者は殆んど稀である。此の理を明にせんが爲には先づ煩惱なるものゝ性質よりして究め來らねばならぬ。前に出した六大煩惱について之を検するに、先づ貪欲とは一切の物に對して染着し、宛も一切の物は吾一人の爲に存せるが如くに錯り見るよりして起るのである。次に瞋恚は些かたりとも吾と違ふものに對して不快を感ずるの心が増長して生ずる所である。次に愚癡は吾が一切の事物に對して暗きことを反省せず、敢て吾が蒙を破らんと努めぬよりして長じ來るものである。次に憍慢は自ら未だ得ざるを既に得たりとし、吾を品すること分に過ぎたるより生ずるもの

である。次に疑惑は己を虚しうして他の教を聴くの心なく、私情に囚はるゝよりして起るものである。次に惡見は要するに皆己の見る所を執つて動かざるよりして生ずるのである。斯く觀來る時は凡ての煩惱いづれも小き自己に囚はれて其他を顧みざるの陋見より來るものなることを知るべきである。

然らば自己とは果して斯の如くに小なるものであるか、自己に執して一切を敵とせざるべからざるものであるか。譬へば數千里の大海に三尺の波が起つたとしやう。此の波の「自己」は三尺の大きさに過ぎぬけれども、此の三尺の波を成せる水は數千里の大海全體の水と相連つて些かの間隔をも存せぬのである。されば此の波の眞の「自己」は三尺の大きさではなくて、數千里に連れる大海の全體ではないか。此の如くに吾と他とを觀察し來る時、初めて小なる自己以外に大なる自己のあることに觀到るべきで

ある。釋尊が涅槃經の中に「一切衆生が異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり」といひ給へるも、何等不思議の言ではない。此の如くに理論の上に於て論斷することは甚しく困難ではないが、常に此の心を以て身を處し世に立つことは頗る難事である。而もこれ決して不可能の事ではない。釋尊が、「我本誓願を立て一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき」といひたまへるは(法華經、方便品に出づ)決して空言ではない。若し能く菩薩の行を積んで怠らぬものは、其の機根の利鈍によつて遲速の差はあつても、終に佛の境界に達し、一切衆生を包容すべき大慈悲を具ふることを得べきである。

若し菩薩の行を積んで懈怠なき者でなければ、決して佛の境界には近づき得べきではない。何となれば煩惱の根を絶つこと決して出来難いからである。彼の阿羅漢の如き、よく一切の煩惱を殺し盡して淡然泊然たる生

活を爲し得る者でも、其の煩惱の根柢は未だ抜き盡されたのでないから、眞の覺者たるには前途猶ほ遼遠である。夫れ煩惱は小き自己に囚はれて他を顧ることを知らぬよりして起ること、既にいへる所である。今自ら煩惱を殺し盡したりといふも、自ら煩惱を斷ち得たる者として高く標置し、自身を昏迷の凡夫と峻別し、更に進んで彼の昏迷の凡夫等を濟はんとするの慈心なき者は、猶ほ自己に囚はるゝの範圍を脱し得ざるものではないか。釋尊之を呵責して「解脱の深坑に墮ちて、自ら利し佗を利すること能はざる者」(華嚴經に依る)と斷じたまへるは謂ありといふべきである。

名に囚はるゝ者は名といふ深坑に墮ちたものである。利に囚はるゝ者は利といふ深坑に墮ちたものである。此等はずもとより凡夫の境界である。煩惱を斷じて解脱を得たる者は此等よりも高きこと勿論であるが、彼等に凡夫を濟ふの心の無いのは、是れ其の解脱に囚はれたるが爲であつて、即ち

解脱の深坑に墮ちたものなのである。其の高下の別は有るけれども、深坑に墮ちたることは即ち一である。斯れば自ら進んで佛の境界に近づくとともに出来ず、又他の者を誘つて道に入らしむることも出来ぬのである。是れ釋尊が自利と利他と共に缺けたりとして呵責したまへる所以である。既に煩惱を斷じ得て、なほ斯く佛の呵責を免れぬのは何の故であるか。是れ實に無始の昔より吾等の心に纏へる所の無明を斷じ得ざるが爲に外ならぬのである。

此の無明とは如何なるものであるか。要するに自ら限り自ら小にするの心である。佛性を具へても而も、自ら限り自ら小にするが故に、少しく得る所あれば即ち自ら足れりとし、更に進んで佛陀と一致すべく努力しやうといふ大志に乏しいのである。法華經信解品に迦葉等が佛に對して自ら懺悔し、「迷惑無知にして小法に樂著せり」といつたのは此の意である。

斯く自ら限り自ら小にする故に、四無量心に缺けたるは已むを得ぬ所である。此の四無量心が相合して一となる時は、自己と他人との間の牆壁が漸く取り除かれ、斯くて一步は一步より佛の境界に近づき得べきものである。四無量心が缺けてゐるのは、是れ無始よりの無明住地の去り得ざる所以である。四無量心が具足してその極點に達せるものは即ち佛である、佛にして初めて初めて無明住地を斷じ盡すことが出来る。菩薩は其の修行の重ると共に漸く此の無明の纏綿を脱し行くこと、宛も黎明の天に漸く光を増すに隨ひ、地上の闇が漸く取除かれ行くのと同じである。日の天に中して、地上に照されざるもの無きが如くなる時は、即ち其の行の滿ち、其の徳の成ぜる時である。

餘論(廿二)

菩薩の身を意生身といふのは、衆生濟度の意によつて受け得たる身といふ意である。苟くも佛恩の貴きに感激し、自ら覺を得ると共に、一切衆生に覺を與へ、佛の教化を贊くべき目的を以て大乘の道に入る者は、皆これ菩薩の行に向へる者として佛の深く嘉したまふ所である。然れども人々の機根相異り、其の努力の淺深大小相異なるが故に、其の具へ得る所の徳は千差萬別である。但し其の高き者と雖も之に安んじて努めざる時には、永く上達の途を塞がれ、其の卑き者と雖もなほ努めて止まぬならば、終には如來の地位にも達し得べきである。

意生身に三等を分つことは、華嚴、楞嚴等の諸經にも出てゐる。一には三昧樂正受意生身、二には覺法自性性意生身、三には種類俱生無行作意生身である。三昧の樂といふは世俗の樂と異なるものである。世俗の樂は境によつて與へられ又失はれるものである。是故に樂は必ず苦を伴ふことを

免れぬ。斯る苦樂を離れ盡して心に安靜を得、如來の法を信じ、如來の化を贊くるを以て樂とするのが即ち眞の樂であつて、斯る樂は其の積み來れる修行に應じて自ら生じ來るものである。故に「正受」といふのである。次に覺法自性性といふは萬有の實相を究め盡したことである。法とは即ち萬有の謂である。一々の物は當に生ずべくして生じ、當に變ずべくして變じ、其の自ら具有せる所の本性を盡さぬものはない。深く此に究め到れば其の千差萬別を一貫する所の原理あることを明にすることが出来る。是れ即ち「自性の性」である。此の自性の性を覺れるが故に、名けて覺法自性性といふのである。次に種類俱生とは如何なる行に於ても自在なるをいふのである。既に諸法の實相を明らかに、諸法は畢竟唯一なる佛の力の發現せるものなることを知れば、法華經壽量品に所謂、如來秘密神通之力とは是れである。これ眞によく一切の事を知りよく一切の物を知るもので

ある。是を以て如何なる行に於ても自在ならずといふことはない。即ち「種類と俱に生くる」といふ所以である。而して其の自得したる状態は宛ら鏡の萬象を映すに盡く自在にして自ら作爲の意なきが如くなるを以て、更に稱して『無行作』といふのである。

阿羅漢辟支佛に比ぶれば、菩薩は極めて尊貴なものである。就中第三の意生身を得たる者の如きは、殆んど佛陀の地位に達せんとする者である。而も佛陀の具へたまへる力は無限であり、佛陀の施したまへる慈悲は無量である。之に比ぶる時は、大力の菩薩と雖もなほ等しきことを得ぬ、況んや阿羅漢辟支佛の徒は猶更である。夫れ人々皆佛性を具へつゝも、遽かに佛身を成じ得ぬのは、是れ自ら限り自ら小にするの心の去り盡されぬ爲である。之を無明住地といふことは前に委しく説いた所である。

蓋し徳を成し力を具ふるは其の果で、道に入り行を修するは其の因であ

る。而して因よりして果を生ずるには猶ほ縁の之に伴ふことを忘れてはならぬ。縁の相應するものなければ其の因があつても其の果を成ずることとは出来ぬ。譬へば食物を取るによつて血を増し肉を増すは明なことであるが、此の食物は胃腸を経て後でなければ肉となり血となることは出来ぬ。食物を取るは因にして血肉を増すは果である、而して胃腸を過ぐるのは其の縁である。若し胃腸に病があれば、たとへ養分の多い食物を取つても血を増し肉を増すことは出来ぬ。是れ縁の相應せざるが爲に因の妨げを受ける實例である。然らば此の縁の悪いのは之を如何ともすることが出来ぬかといふに、必ずしもさうではない。胃腸を癒すには、薬用となるべきものを攝取しなければならぬ。即ち因は縁によつて妨げらるゝけれどもその縁を善くするが爲に更に多くの力を其の因に致すべきである。吾等は徳を成し力を具へんが爲に道に入り行を修するに當り、惡縁の爲に妨げら

るゝことが多いけれども、決して絶望することなく、更に多くの努力を修行の上に積めば、終に悪縁を化して善縁と爲し得べきである。

今阿羅漢辟支佛も三種の菩薩も、共に煩惱を去り盡して清淨なる行を積むものではあるが、共に全く無明住地を脱し得たのではない。是を以て未だ佛身を成じ得ぬのである。是れ本經に「無明住地を縁とし無漏の業を因として阿羅漢と辟支佛と、大力の菩薩の三種の意生身を生ず」と説かれたる所以である。然れども此の無明住地なる悪縁は全く絶ち難きものではない。其の因たる淨行を積み行くに随ひ、漸くに其の纏綿を脱し得べきである。たゞ能く之を辨へて勇猛精進、更に懈怠なき者のみか終に能く佛身を成すべきである。

又本經に「取を縁とし有漏の業を因として三有を生ずる」とあるのは、即ち凡夫の境界である。三有とは欲界の生死と色界の生死と、無色界の生

死のことで、幾度生を受くるとも常に此の間を巡環して、此の外に脱出し得ぬものが、是れ凡夫の常態である。此の理を詳にせるものは、即ち阿含經に示されたる十二因縁の説である。十二因縁とは即ち一に無明、二に行、三に識、四に名色、五に六處、六に觸、七に受、八に愛、九に取、十に有、十一に生、十二に老死である。

一に無明とは過去の世に於て積み來れる煩惱をいふのである。二に行とは此の煩惱の爲に過去の世に於て作つた善惡種々の業をいふのである。三に識とは過去の世に於ける業の報として、現世に於て受胎の際に具へたる稟性をいふのである。四に名色とは現世に於て發育し來る身心一切の作用をいふので、名とは即ち心をいひ、色とは即ち身をいふのである。五に六處とは六根といふに同じく、即ち眼耳鼻舌身意の分れ具はれるをいふのである。六に觸とは吾が身が外界の物に觸れて生ずる所のもので、即ち一

切の感覺である。七に受とは各種の感覺に伴つて生じ来る苦樂等の感情である。八に愛とは此等の感情に基いて發達し來れる愛欲である。九に取とは此の愛欲により種々の行爲を生み來らんとする、欲望の作用、意志の作用等をいふのである。十に有とは即ち業で、意志の發現して種々の業となつたものである。十一に生とは、即ち生活である。十二に老死とは生に續いて必ず起り來るべきものである。さて斯く生を續けて、やがて死んで行く迄に多くの煩惱を作り、多くの行を積む故に、之によりて次の世の識、名色等を生じ、輪轉巡環して盡くる所がないのである。能く之を知る者は煩惱を絶つべき道を求め、佛の聖教に歸依して共に聖流に入るのである。聖と凡との分るゝ所は十二因縁の支配を受くると、能く之を絶つとに在る。

餘論 (廿三)

釋尊の出家して山に入りたまふに當り、父王は深く之を憂ひ、憍陳如等五人をして之に従はしめた。此の五人は皆王の姻戚にして王廷に仕へ、忠勤を勵める者である。五人は釋尊に従つて共に苦行を重ねてゐたが、釋尊はやがて苦行の覺を得る所以にあらざるを觀破して之を抛ち、牧女が捧ぐる牛乳を飲み、更に自ら深く究むる所あらんと決心をされたのであるが、五人は其の眞意を悟らず、是れ正しく魔道に入られしものなりとて、共に離れ去つたのである。其後釋尊成道して山を出たまひ、波羅奈國(波羅奈とは恒河の流域に在るを以て名けたのである)に至りたまへる時、彼の五人はまた來て従つた。釋尊即ち鹿野園中に此の五人を集めて、初めて法を説きたまひ、五人は共に出家して永く釋尊に仕へた。五人とは憍陳如、頹鞞、跋提、十力迦葉、摩男俱利、後世これを五比丘といふ。

此の五比丘は何れも佛に仕へて能く行を積み徳を成せるものである。

其の一人なる須髥は譯して馬勝といひ、多く馬勝比丘として知らるゝ人であるが、其の容儀端正にして舉止安舒自ら人の畏敬を得た。彼の舍利弗と目連とは共に釋尊の十大弟子中に列したる人々であるが、其の初めて佛道に入つたのは馬勝比丘の爲である。舍利弗と目連とは親友の中で、あつて共に外道の學を勵んで名聲世に聞え、共に百餘人の弟子を有してゐたが、心中に不安の念あり、自ら之を除くべき力の無いことを歎きあつてゐた。因て兩人相約して、先づ解脱の道を求め得たるものは必ず他の一人に告げ、共に其の道に入らうといつて居た。斯くて舍利弗は一日王舍城を行くうちに、一人の比丘の威儀端然、安舒として歩を運べるを見て深く之を羨み、其名を問へば、即ち馬勝比丘であつた。それから更に委しく問うて佛の世に出たまへるを知り、目連と共に竹林淨舍に赴いて佛に謁し、直ちに佛弟子に加はつた。二人の弟子二百人も亦共に佛道に歸依した。又此の王舍城の

一長者は馬勝の姿を見て歡喜渴仰の念を生じ、終に僧衆の爲に六十の房舍を建てたりといふことである。

さて釋尊が五比丘の爲に説きたまへるは四諦の説であつて、これ實に佛説の入門たると共に、又五十年間の説法を一貫したる重要な思想である。四諦とは所謂苦諦、集諦、滅諦、道諦である。諦とは審實不虛の義で、即ち佛智を以て見究められたる所は決して誤りがない故に諦といふのである。先づ三界は盡く苦なりと斷ずるを苦諦といふ。人々は此間に於て苦を脱し樂を求めんとして力を盡すけれども、其の認めて樂とする所は眞の樂でない故に、必ず苦を伴ひ來るのである。涅槃經には八苦を擧げてある。先づ生病老死の四は何人も共に知る所の四苦である。之に加へて第五に愛別離苦がある、いかに自ら愛する所のものと雖も之と別離せねばならぬ時がある。第六に怨憎會苦で、自ら好まざるもの若くは敵とし憎む所のものに

も相會せねばならぬ時がある。第七には求不得苦で、いかに勢力ある者でも自ら求むる所のことが悉く達せらるゝものではない。必ずや求めて得ざる所のものがある。第八には五陰盛苦で、身心の活動の盛なるが爲に生ずる種々の苦がある。此等は三界を通じての常態である。

既に苦諦を知れば、此の苦の如何にして生じ來れるかを知らなければならぬ。之が爲に集諦を説かれたので、集諦は世間の現實の状態を説き示されたものである。人々皆煩惱あり、その爲す所の善惡の業種々無量である。此等の集つて成れるものが即ち世間である。故に苦を滅せんとするには、此等の累を脱せなければならぬ。斯く苦集の二諦を説かれて後に、第三の滅諦を説かれた。滅とは即ち涅槃である、眞の涅槃を得ることが即ち佛法の極致である。

法華經に『諸苦を滅盡せるを第三の諦と名く、滅諦の爲の故に道を修行

す』とある。涅槃に達せんが爲には正道に依らなければならぬ。是を以て道諦を説かれたのである。道を修するに重要な條件を教へて八とするので、是れが所謂八正道である。八正道とは一に正見、二に正思惟、三に正語、四に正業、五に正命、六に正精進、七に正念、八に正定である。正見とは理を見て極めて分明なるをいふ。正思惟とは更に正しく思惟籌量して眞智を長ぜしむるをいふ。正語とは眞智の發して言となる所、一切非理の語なきをいふ。正業とは身に於て一切邪業なく清淨に住するをいふ。正命とは常に正法に順つて生を送るをいふ。正精進とは涅槃に達せんが爲に努めて懈怠なきをいふ。正念とは眞智を以て正道を憶念し更に邪念の生ぜぬことをいふ。正定とは眞智により清淨の禪定に入るをいふ。

斯く四諦を立つる中に、最も重要な第三の滅諦である。苦諦と集諦とを説くのは是れ滅を求むるの念を發せしめんが爲である。道諦を説く

のは是れ滅に達するの路を示さんが爲である。滅諦は是れ主にして他の三諦は従である。此の滅即ち涅槃なるもの、解釋に等差あるが故に大乘小乗等の別が生じて來る。隨て聲聞たも緣覺たも菩薩たも佛たるの別の生ずることは前に悉しく説く所の如くである。

餘論 (廿四)

觀無量壽經には『諸佛如來は是れ法界の身にして、一切衆生の心想の中に入りたまへり。是故に汝等、心に佛を想ふ時は、是の心即ち是れ三十二相八十隨形好なり、是の心作佛するなり、是の心是れ佛なり』とある。此の語は吾等衆生の具有せる佛性が皆同一佛性であることを示さるゝと共に、十方三世の諸佛の皆同一佛なることを示さるゝもので、其の義良に深しといふべきである。譬へば黄金を採るに、或は山間の岩石の中よりし、或は水底

の泥沙の中よりするが如くで、其の在る所は二々に異り、その混ざる所の物も種々相同しからず、隨て之を採掘し之を精鍊する所の方法も種々に異つて居る。然れども其の精金となるに及んでは何れも皆同一にして、更に相異なる所はない。諸佛の世に出たまへる時は相異り、その修行を積みたまへる道程と事情とも各々相異つて居るけれども、其の道を成じて佛となりたまふに及んでは、彼此相異なる所なく、其の智慧に於て、其の慈悲に於て、其の力に於て全く以て同一である。是れ本經に『法に優劣無きが故に涅槃を得、智慧等しきが故に涅槃を得、解脫等しきが故に涅槃を得、清淨等しきが故に涅槃を得』と説かれたる所以であらう。佛の在世に値ひ奉るのは極めて希有の事で、優曇華を見得るにも譬へられてある。けれども佛の遺したまへる法は永く朽らざれば、吾等に傳はつて居る。勿論吾等は諸佛の法を悉く傳へられたのではないが、釋迦

牟尼佛が「諸佛は語異ること無し」と告げたまへるを信ずるが故に、一釋迦牟尼佛の法に對して絶對の歸依を捧げ得るのである。凡夫の生死流轉の中に漂つて居るのを本經には「無覆護」と稱し、聲聞緣覺の煩惱を斷じつゝ而も猶ほ絶對の覺を得ぬのを「無依」と名けてある。此の無覆護と無依との者に護となり依となるものは、如來の法を措いて他に何者もない。曹溪の惠能大師は金剛般若經の釋義を作り且之に序して、「煩惱は堅しと雖も般若の智能く破る。殺羊の角は堅しと雖も鑽鐵能く壞る。此の理を悟る者は了然として性を見る。涅槃經に云く、佛性を見る者は衆生と名けず、佛性を見ざる是を衆生と名くと。……口に經を誦すと雖も光明生ぜず。外に誦し内に行ずれば光明齊等なり。内に堅固無ければ定慧即ち亡す。口に誦し心に行ずれば定慧均等なり。是を究竟と名く。金は山の中に在れども、山は是れ實なることを知らず、實もまた是れ山なることを知らず。

何を以ての故ぞ、性無きが爲の故なり。人は則ち性あり、其の實を取りて用ゆ。金師に遇ふことを得て山を鑿鑿し破り、鑛を取りて烹鍊すれば遂に精金と成り、意に隨て使用して貧苦を免るゝことを得。四大身中の佛性も亦た爾なり。身を世界に喩へ、我を山に喩へ、煩惱を鑛に喩へ、佛性を金に喩へ、智慧を工匠に喩へ、精進勇猛を鑿鑿に喩ふ。身の世界の中に人我の山有り、人我の山の中に煩惱の鑛有り、煩惱の鑛の中に佛性の實有り、佛性の實の中に智慧の工匠あり、智慧の工匠を用ひ、人我の山を鑿り破り、煩惱の鑛を取て覺悟の火を以て烹鍊すれば、自の金剛の佛性を見ること了然として明淨なり。……空しく解して行はざれば名のみ有りて體無し、義を解して修行すれば名體俱に備はる。修せざれば即ち凡夫、修すれば即ち聖智に同じ。……智なれば愚心を起さず、慧なれば其の方便有り。智は是れ慧の體、慧は是れ智の用なり。……祇だ世人の性は堅固なること無きに緣りて、一切の

法の上に於て生滅の相有り諸趣に流浪して未だ眞如の地に到らず。並に是れ此岸なり。大智慧を具せんと要せば、一切の法に於て圓滿にして生滅の相を離れよ。即ち是れ到彼岸なり。亦た云く、心迷へば則ち此岸、心悟れば則ち彼岸なり。心邪なれば則ち此岸、心正なれば則ち彼岸なり」といつた。斯く鑛を烹鍊して漸く雜物を去り、終に精金を得るが如くに、煩惱が除かれて佛性の光を發するに隨ひ、漸く凡夫の境よりして佛陀の境に近づくのである。然るに此に至つて一の疑義が起る。諸佛は皆同一佛なれば、佛道に入る者は皆同一點に向つて進むわけである。然らば人々は漸く其の個性を沒却し去るべく、世に立ち事に當つて各々其の任を果し、其の特殊の技能を示すことの出来ぬやうになりはせぬか。斯くては佛法と實生活とは終に相乖離するに至るであらう。

此の疑義を解かん爲には、鑛と精金との喩を再び用ゐるのが便である。

金の未だ精ならざる時には、この混ざる所のもの各相異なるが故に、甲の塊と乙の塊とは各その特色を具へて居る。而して精金となるに及んでは甲も乙も同一精金にして、之を辨別することは出来ぬ。されども更に此の精金を以て器と爲せば、如何なる器と爲すも皆光彩陸離として永く鏽びず、朽ちず、人皆その美を稱するのである。佛性を開發するのは金を精にするが如く、世に立つて業を擇み技を練るは之を以て器と爲すが如きものである。體と用と異り、本と末との別がある。佛道の修行によつて個性を失ふが如く見ゆるのは、混合せる雜物を去つて精金に近くなつたのと同じことである。是れ更に世に立ち事に當るが爲に害無きものである。煩惱の無いものは其の心更に蔽はるゝ所が無い。蔽はるゝ所が無ければ能く事物の眞相を觀、また一切事物の間に宿れる所の佛陀の靈光の貴きをも觀得るが故に、いかに細微の物と雖も之を輕視するといふことは無い。斯くて其の究むる所

は極めて深く、その見る所は極めて精しく、其の爲す所は極めて懇にして且
到れるものであれば、一々の事と業とに皆精金の光を發し得べきである。
法華經に所謂「治世の語言、資生の業等、皆正法に順ぜん」(法師功徳品)とは此
の謂である。

餘論 (廿五)

傳光錄に彌遮迦尊者が提多迦尊者に逢ひて契悟したることを記して「師
は中印度の人にして八千の仙人の長者なり。一日衆を率ゐて提多迦尊者
を瞻禮して曰く、吾昔師と同じく梵天に生じ、吾は阿私陀仙人に逢ひて仙法
を受け、師は十力の弟子に遇ひて禪那を修習す。是より報分れ途を異にし
て已に六劫を経たり。尊者曰く、支離として劫を異ぬ、誠なるかな虚ならず。
今汝邪を捨て正に歸し、以て佛乘に入るべし。師曰く、昔阿私陀仙人我に記

と授けて曰く、汝劫後に六劫にして當に同學に遇ひ無漏果を證すべしと。
今や相遇ふ、宿縁に非ずや。願ふは和尚の慈悲我をして解脱せしめよ。尊
者時に出家して具足戒を受けしむ。餘の仙衆は初めより我慢を生ぜり。
時に尊者大神通を示す、仙衆此に於て俱に菩提心を發して一時に出家す。
尊者示して曰く、佛の言はく、仙を修し小を學するは繩の牽挽するに似たり
と。汝自ら知るべし、若し小流を棄つれば、頓に大海に歸し、當に無生を體すべ
し。師聞きて契悟す。

夫れ仙を學し壽命長遠なることを得、神通妙用を得ると雖も、過去八萬劫
未來八萬劫を通理するのみ、前後遠く鑑ることなし。非相非々相を修して
無心想定に入ると雖も、悲むらくは非用天に生じ長壽の天となりて色體を
失ふことは得たりと雖も、猶ほこれ業識流注の分なり、佛に參ずることも得
ず、道に通ずることも得ず、彼の業識の報帶る時、かへりて無間獄に墮在す。

故に繩の挽きまつふに似たり、終に解脱の分なし。小乗學者は初果を證し二果を證し三果を證し四果を證し、獨覺を證すと雖も、猶ほこれ身心中の修習、迷悟中の辨道なり。是によりて初果の聖者、八萬劫を経て始めて初心の菩薩となる。二果の聖者は六萬劫を経て始めて初心の菩薩となる。三果の聖者は四萬劫を経て始めて初心の菩薩となる。獨覺の聖者は十千劫を経て菩薩道に入る。善因終に歸すと雖も、憾むらくは是によりて輪轉の業猶ほ絶えず、亦是れ繩の牽挽するに似たり、本解脱の人にあらず。實にそれ八十八使の見思、塵沙無量の惑を破して、纖塵の止むべき無く、一毫の惑なしと雖も、徒に有爲功業にして、終に無爲の佛果にあらず。然れば本にかへり源にかへる。悟を待て則と爲すの辨道悉く皆これに類す。

故に諸人は無をも要すること勿れ、恐らくは落空亡の外道に同ふしつべし。空劫威音に止まるべからず、または是れ魂不散底の死人に似たり。妄法

の空華を止めて眞實の本性に達せんと思ふこと勿れ、却てこれ無明を斷じ中道を證する聖者に類す。雲なき所に雲を起し、玳なき所に玳を生ず、宛も伶俚他國の窮子なるべし。無明迷醉の貧客なり、思ふべし、汝は是れ誰人なれば生前と説き死後と説く。更に何の過未今をか存ぜん。曠劫以來片時も相誤ることなし、生より死に至てたゞ是れ恁麼なり。然りと雖も一度築著せざれば、徒に根境に迷惑して自己を識らざる者なるべし。目前を疎くするなり。故に身心の生起する所をも知らず、萬法の流出する所をも辨へず、故なく拂はんと思ひ、故なく求めんと希ふ。是の如くなる故に、佛をして煩はしく出世せしめ、祖師をして切に垂誠せしむ。恁麼に垂誠して手を垂ると雖も、猶ほ自己の知見に迷惑せられて、或は不知と説き、或は不分と説く。眞個無明なるにもあらず、親切函蓋するにもあらず、徒に思量計較の中に在りて正邪を見別し來る。知らずや汝等諸人、呼に隨ひて應じ、指に隨ひ

て到る、是れ擬慮より生ずるにあらず、覺知より起るにあらず、正しく是れ汝が主人公。面目なく體相なし、然れども動著して止む時なし。是によりて此の心生じ來る、是を名けて身といふ。此の身現はれてより然も四大五蘊、八萬四千の毛孔、三百六十の骨節、合成して汝等が一身たり。玉の光あるに似、聲の響を帶するが如し。故に生來死去、一時も缺けたる所なく、一時も餘れる所なし。憇癡の生滅、生ずれども生の始めなく、死すれども死の跡なし。恰も海中の波浪起りて痕なきが如く、また波浪の滅せざるが如し。去り去れども却て別處に往かず、たと海の消息として大波小波起て消えず。汝等が心もまた是の如し、動著してやむ時なし。故に皮肉骨髓と現はれ來り、四大五蘊と使用し來る。また桃花翠竹と現はれ來り、得道明心と悟證し來る。聲色品分れ見間道異なり、著衣喫飯と受用し、言語事業と運用す。分れ分るれども差別の法にあらず、現はし現はるれども體相に止まらず。恰も幻人

の諸の幻術をなすが如く、夢中に諸の形像を出生するが如し。鏡中に萬像千變萬化すと雖も只此の一面の鏡なり。若し是の如く知らずして、從に仙を修し小を學し來ちば、解脱の期なし。諸人盡く是れ縛する者なし、何ぞ新に脱するあらんや。迷悟固より無く、縛脱前より離る。是れ無生なるにあらずや、是れ大海なるにあらずや。小流何れの處にかある。塵刹微塵刹盡く法界海なり。溪流瀑漲江河旋回する、皆是れ海上の潑轉なるなり。而して捨つべき小流なく、取るべき大海なし。憇癡なる故に節目自ら除けり、舊見一度に改まりき。仙を捨て出家す是れ即ち宿緣契發するなり。而も諸人憇癡に參來參去し心語即通す。實に是れ親友親友と相見し、自己自己と點頭し來る。共に性海中に游泳して片時も隔歷することなし。實に憇癡に威發せば、即ち是れ宿緣現はるべきなり。見ずや馬大師曰く、一切衆生、無量劫より來こゝか法性三昧を出ず、常に法性三昧の

中に在りて著衣喫飯し言談祇對す。六根の運用、一切の施爲、盡く是れ法性なりと。是の如く云ふを聞きて、法性の中に衆生ありと會すべからず。法性といひ衆生といひ、水と波といはんが如し。故に言によりて水と波と説く、豈これ多種あらんや。今朝又因縁を説破す、更に卑頌有り、大衆聞かんと要すや。

縦たひ天に連りて秋水の潔きあるも、何ぞ如かん春夜月の朦朧たるに。人家多くは是れ清白を要し、掃ひ去り掃ひ來るも心未だ空ならず』とある。

此に所謂小流を棄て大海に歸することを知る者は、即ち如來の通達無碍なるを瞻仰することを知るべきである。知らざる所無く照さざる所無き智慧は、一切衆生を救ふべき一切の法を生じ來るが故に、佛を名けて法王といひ又法主といふのである。而して佛の法を説きたまふに當ては、何者にも制せられず、何事にも妨げられず、聽く者の機根を知つて自在に説かるゝ

のでこれを稱して無畏といふ。また之を師子王が一吼して百獸の腸に徹するに比し、名けて師子吼といふのである。佛に近づく者は、また漸くに自在なるを得べきである。

餘論 (廿六)

佛の小乗の法を學して聲聞緣覺の覺を得たる者が、終に菩薩の道に入つて大乘を學し然る後に作佛するを得べきことは、既に委しく説く如くである。更に佛教以外の教について之を考ふるに、其等もまた同じく大乘佛教によつて統一せらるべきものなること疑ひなき所である。

印度に佛教以外の教派は凡て九十五あつて、之を九十五種外道と稱するのであるが、此の九十五派は佛教よりは異端視せられたもので、其中には佛教の弘布について大なる迫害を興へたものも少くはない。然れども彼等

の教へた所が全く佛教と歸趣を異にしたわけではない。要するに人々を導いて苦惱多き生活を脱せしめ、宇宙人生の理を究め、生死流轉の縛を離れ、平和にして歡喜に充てる一生を送らしめんことを期せるものに外ならぬのである。而して其の究め得たる所の事には意義極めて深遠にして、佛教徒をも啓發すべきものも決して少くはない。現に釋尊の所説中にも、外道の所説によつて啓發せられたる痕迹を認むべきものも往々にして有る。但だ外道の法は苦惱の根本を除くべき道に於て誤りがある。是を以て或は難行苦行を續け、或は理論の討究に力を用ひ、人の堪へ難きに堪へ、人の未だ究めざるに究め到るとも、なほ依然として煩惱に纏縛せらるゝを免れぬのである。彼等にして慈悲忍辱を以て身を持する菩薩の行の貴きことを知り、計我執著を離るゝの最も切要なることを覺り、翻然として醒悟するならば、必ずや其の主張を抛つて佛門に歸依しなければならぬわけである。

彼等の究めたる事と、彼等の努めたる業とが盡く價值のないのではない。たゞ其の根本に於て差^{たが}ふ所あるが故に、一切其の効を來し難いのである。若しよく大乘の教に歸し、菩薩の行を勵むならば其の努力の結果は皆悉く活きて來べきである。餘論二十三に出した舍利弗、目連の例、餘論二十五に出した彌遮迦^{みしか}の例を以て之を證し得べきである。

儒教は支那の古代より傳はつたる王道の教が、偉大なる孔子の人格によつて大成せられたもので、孔子は自ら「述べて作らず、信じて古を好む」といひ、後世よりは孔子を目して「集めて大成す」といふのである。其の教は心を治むるの本として仁を説き、世を治むるの本として禮を説き、修身齊家の効を推して天下に及ぼすを主とするものである。詮ずる所は人々をして現實の世に於て己を全うし務を果さしむるを主とするのであるから、前生若くは來世を説かず、また佛神等の功德をも説かぬ。然れども孔子は

天を重んずることを知り、又天の必ず自己を護るべきことを知つて居た。司馬桓魋が孔子を殺さんとするに當つて、孔子は「天徳を予に生せり、桓魋其れ予を如何」といつた。匡人の爲に圍まるゝに當つても、孔子は「天の未だ斯文を喪はらざる匡人其れ予を如何」といつた。又自身の事を語つて、「吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る」といつた。天命とは天の己に命ぜらるゝ所をいふのである。其の「命を知らざれば以て君子たる無し」といふのも此意である。

書經、詩經等に現はれたる所は古代に於ける支那人の思想を知るべきものであるが、此等に現はれたる「天」といふものは、吾人が一切の善惡正邪の行を監視して、之に賞罰を與ふるもので、「上帝」とも若くは「帝」とも稱せられて居た。王者は天に命ぜられ、天に代つて國家を治むる者なるが故に「天子」といふので、若し其の徳衰へて天に代るの任を果し得ざるに至れば

天は更に他の者に命じて王者たらしむるのである。こゝに天の命革まる故に、之を「革命」といふ。然るに孔子以後に及んでは、天を以て單なる監視者とは爲さず、吾人を愛護し教導する所の大慈悲心をば、天道の運行の上に於て認めたのである。孔子曰く「予言ふこと無からんと欲す」子貢曰く「子如し言はずんば、小子何をか述べん」孔子曰く、「天何をか言ふや、四時行はれ百物生ず。天何をかいふや」と。之によつても孔子が自ら天を以て其の人を教へ世を導くの範と爲したる意は明である。孔子はまた「聲色の以て民を化するに於けるや未なり。詩に曰く徳の輶なきこと毛の如しと。毛は猶ほ倫有り。上天の載こは聲も無く臭も無く、至れるかな」といつた。是れは天の聲無くしてよく人を教へ世を化するの力を讚嘆したものである。されば『中庸』の書は天道を以て人道の本と爲すべきことを教へたもので、人道に於て仁を本とするのも、要するに天の物を生じ物を育するを範と

したるものである。即ち「天地の道は一言にして盡すべし、其の物を爲る貳ならず、其の物を生ずる測られず。天地の道は博なり、厚なり、高なり、明なり、悠なり、久なり」とある。又「誠は天の道なり、之を誠にする者は人の道なり」ともある。又、「天の命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道といひ、道を修むる之を教と謂ふ。道なるものは須臾も離る可からず、離る可きは道にあらず」ともある。是れ天人の相關する所を明にしたる語である。而して「唯だ天下の至誠は能く其の性を盡すことを爲す。能く其の性を盡せば則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡せば則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡せば則ち以て天地の化育を賛く可し。以て天地の化育を賛く可ければ則ち以て天地と參す可し」といふに至つては其意最も明白的確である。

易に至つては更に數歩を進めたるものである。其の「文言」の中には、「夫れ大人は天地と其の徳を合し、日月と其の明と合し、四時と其の序を合し、鬼神と其の吉凶を合し、天に先ちて天違はず、天に後れて天の時を奉ず。天も且つ違はず、而るを況んや人に於てをや、況んや鬼神に於てをや」とある。又其の繫辭傳には、「之を鼓するに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てし、日月の運行一寒一暑。乾道は男を成し、坤道は女を成す。乾は大始を知り、坤は成物を作す。乾は易を以て知り、坤は簡を以て能くす。易なれば則ち知り易く、簡なれば則ち従ひ易し。知り易ければ則ち親あり、従ひ易ければ則ち功有り。親有れば則ち久しかる可く、功有れば則ち大なる可し。久しかる可きは賢人の徳、大なる可きは賢人の業。易簡にして天下の理得らるるに當つては則ち、「天地と相似たり、故に違はず。知は萬物に周くして道は天下を濟ふ、故に過ぎず。旁行して流れず、天を樂み命を知る、故に憂へず。

士を安んじ仁に教し、故に能く愛す。天地の化を範圍して過ぎず、萬物を曲成して遺さず、晝夜の道を通じて而して知る」といつてある。更に天道と人道の相關する所以を述べて、「一陰一陽之を道と謂ふ、之を繼ぐ者は善なり、之を成す者は性なり、仁者は之を見て之を仁と謂ひ、知者は之を見て之を知と謂ふ。百姓は日に用ゐて而して知らず、故に君子の道鮮し。諸を仁に顯はし諸を用に藏し、萬物を鼓して聖人と愛を同うせず、盛徳大業至れるかな。富有之を大業と謂ふ、日新之を盛徳と謂ふ、生々する之を易と謂ふ。象を成す之を乾と謂ふ、法を效す之を坤と謂ふ。數を極め來を知る之を占と謂ふ、變に通ずる之を事と謂ふ。陰陽測られざる之を神と謂ふ。」といひ、また「夫れ乾は其の靜なるや專にして其動くや直し、是を以て大に生ず。夫れ坤は其の靜なるや翕ひ其の動くや闢く、是を以て廣く生ず。廣大は天地に配し、變通は四時に配し、陰陽の義は日月に配し、易簡の善は至徳に配す。」と

いひ、更にまた「天地の道は貞にして觀す者なり、日月の道は貞にして明なる者なり。天下の動は夫の一に貞なる者なり。……功業は變に見はれ、聖人の情は辭に見はる。天地の大徳を生といふ、聖人の大寶を位といふ。何を以て位を守る、曰く仁。何を以て人を聚むる、曰く財。財を理し辭を正し、民の非を爲すを禁ずるを義といふ。」といふに至つて、儒教が假令現世に於ける治國平天下を主要の事とすといふとも、其の萬古を通じ、有形と無形とを包容する天地の大道を根柢とするものなることを證し得て尤も明である。

此の「天」なる思想を更に深く究むる時は、如來の法性に究め到るべきである。また天道と相一致すべき人々胸中の至誠を、更に深く觀察し來れば之を佛性として認めなければならぬ。天地に參することを極致とする賢人の行は、即ち菩薩行たるに至つてはじめて完かるべきである。即ち儒教

は大乗佛教の精神をその精神とするに至つて、眞の生命を得べきものなることを知るべきである。

儒教と相對立せるものは道教である。勿論漢以後近代に至るまで支那人の大多數の間に勢力を有したるものは、其の正しき意義を失ひ盡せる所の道教であつて、即ち陰陽五行の理を曲辨して人々の運命を占ひ、天に祈つて福を求むることによりて、低級なる信仰を繋げる者である。此の如きは多く論ずるに足らぬけれども、道教の始祖として仰がるゝ老子の説は、東洋思想の中に在つて確かに大なる精彩を放てるものである。老子の教ふる所は人爲の私を去つて自然の道に復し、無爲無欲を以て世に處するに在る。即ち、「物有り混成す、天地に先ちて生ず。寂たり寥たり、獨立して改まらず。周行して殆からず、以て天下の母たる可し。吾其の名を知らず、之に字して道といふ。強いて之が名を爲りて、大といふ。大なれば近く、近ければ遠し、遠

ければ反る。故に道大なり、天大なり、王も亦大なり。域中に四大あり、而して王は其の一に居る。人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」とある。「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は萬物を生ず。萬物は陰を負ひて陽を抱き、冲氣以て和を爲す」ともある。

此の自然の道に復らんが爲には、名を立て私に執することを絶対に止めなければならぬ。故に「賢を尙ばざれば民をして争はざらしむ。得難きの貨を貴ばざれば民をして盜を爲さざらしむ。欲す可きを見ざれば心をして亂れざらしむ。是を以て聖人の治は其の心を虚にして其の腹を實にし其の志を弱くして其の骨を強くす。常に民をして無知無欲ならしめ夫の知者をして敢て爲さざらしむ。無爲を爲せば則ち治まらざること無し」といふのである。また「天は長にして地は久し、天地の能く長且久なる所以は其の自ら生ぜざるを以てなり、故に能く長生す。是を以て聖人は

其の身を後にして身先だち其の身を外にして身存す。其の私無きを以てに非ずや。故に能く其の私を成す」ともある。而して形式的なる道徳が愈々人をして虚偽に赴かしむるの弊を指摘しては尤も峻烈を極めて居る。曰く「道を失ひて而る後に徳あり、徳を失ひて而る後に仁あり、仁を失ひて而る後に義あり、義を失ひて而る後に禮あり。夫れ禮は忠信の薄にして亂の首なり。前識は道の華にして愚の始なり。是を以て大丈夫は其の厚きに處りて其の薄きに居らず、其の實に處りて其の華に居らず。故に彼を去りて此を取る」と。又曰く、「大道廢れて仁義有り、慧智出て大偽有り、六親和せずして孝慈有り、國家昏亂して忠臣有り」と。又曰く、「聖を絶ち智を棄つれば民の利百倍す。仁を絶ち義を棄つれば民孝慈に復す。巧を絶ち利を棄つれば盜賊有ること無し。此の三の者皆屬する所あらしめ、素を見し樸を抱き、私を少くし、欲を寡くす」と。

また自然の道を形容しては「道の物たる惟れ恍たり、惟れ惚たり、惚たり、惚たり、其中に物有り、窈たり、冥たり、其中に精あり。其の精甚眞にして其中に信有り」とある。又更に「道之を生じ、徳之を畜ひ、之を長じ之を育し、之を享し之を毒し、之を養ひ之を覆ふ。生じて而して有せず、爲して而して恃まず、長じて而して宰せず。是を玄德と謂ふ」といふに至つては、眞によく自然の道を説明せるものである。また「天の道は争はずして善く勝ち言はずして善く應じ、召か^まずして自ら來り、緝然として善く謀る。天網は恢々、疎にして失はず」といひ、「天道は親無し、常に善人に與^あす」といひ、「天道は利して害せず、聖人の道は爲して争はず」といふが如き、何れも天道の何者なるかを説くこと簡にして要を得たるものである。要するに天の道は物を生じ物を護るの大慈悲あつて、而も自ら見^みし自ら主とせざるものである。此の道に基き、互ひに欲を制し奢を禁じ、相争はずして相護るに至れ

ば、世に不祥の事も無きに至るであらう。即ち「道を以て天下に蒞めば其の鬼神ならず。其の鬼神ならざるのみならず、其の神人を傷らず。其の神人を傷らざるのみならず、聖人もまた人を傷らず。夫れ兩ながら相傷らず、故に徳交々歸す」といふのである。

然るに人は自然の道に反して私を立つること已に久しきを以て、其の弊の及ぶ所言ふに堪へぬものがある。即ち「名と身と孰れか親しき、身と貨と孰れか多き、得と亡と孰れか病なる。是故に甚しく愛すれば必ず大に費あり、多く藏すれば必ず厚く亡ぶ。足ることを知れば辱められず、以て長久なる可し」といひ、また、「禍は足ることを知らざるより大なるは莫く、咎は得を欲するより大なるは莫し。故に足ることを知るもの、足るは常に足る」ともいつてある。若し能く無欲なること赤子の如くなれば天下之が敵となるものは無い。即ち「含徳の厚き、赤子に比す。蜂虿虺蛇も螫さず、猛

獸も據らず、攫鳥も搏たず。骨弱く筋柔にして而して握固し」とある。されば人々をして共に相争ふの心を無くさせるならば、天下は常に平なるべきである。即ち「天下水よりも柔弱なるは莫し、而して堅強の者を攻むるに、之に能く勝つこと莫きは、其の以て之に易る無きを以てなり。弱の強に勝ち、柔の剛に勝つこと天下知らざる莫けれども、能く行ふことなし」との説ある所以である。

若し能く天下の人を化して「無爲を爲し、無事を事とし、無味を味ひ、大小多少、怨に報ずるに徳を以てす。難きを其の易きに圖り大を其の細に爲す」といふ如き心を以て世に立ち、「善く士たる者は武ならず、善く戦ふ者は怒らず、善く敵に勝つ者は興にせず。善く人を用ゆる者は之が下と爲る。是を争はざるの徳と謂ふ、是を人の力を用ゆると謂ふ、是を天に配すと謂ふ、古の極なり」といふが如き理想を以て事に當らしむるに至れば、天下復た憂

ふるに足るものは無い。而して各自に其の素朴單純なる生活に安んじ、「民をして死を重んじて遠く徙らざらしめ、舟輿ありと雖も之に乗る所無く、甲兵あり雖も之を陳する所なく、人をして復た繩を結んで之を用ひしむ。其の食を甘しとし、其の服を美なりとし、其の居に安んじ、其の俗を樂み、隣國相望み、鶏犬の聲相聞え、民老死に至るまで相往來せず。」といふに至れば即ち理想の生活に達したるものである。

之を導いて斯の如く素朴單純の生に復らしむるは政を爲す者の責任である。故に其の志とすべき所を示して、「持して之を益すは其れ已むに如かず、揣りて之を銳くすれば長く保つべからず。金玉堂に滿つるも之を能く守る莫し、富貴にして驕れば自ら其の咎を遺す。功遂げて身退くは天の道なり」といひ、「虚を極に致し、靜を篤きに守れば萬物並び作れども、吾以て復るを觀る。夫れ物の芸々たる各その根に復歸す。根に歸るを靜とい

ふ。是を復命と謂ふ、復命を常といふ。常を知るを明といふ、常を知らざれば妄作して凶なり。常を知れば容なり、容なれば乃ち公なり、公なれば乃ち王なり、王なれば乃ち天なり、天なれば乃ち道なり、道なれば乃ち久し。身を歿するまで殆からず」といふのである。而して政を爲すの要諦は「民の餓ゆるは其上の税を食ふの多きを以て、是を以て餓ゆるなり。民の治め難きは其の上の爲す有るを以て、是を以て治め難きなり。民の死を輕んずるは其の生を求むるの厚きを以て、是を以て死を輕んず。夫れ唯だ生を以て爲す無ければ是れ生を貴ぶよりも賢れり」の一語に盡きてゐる。而して「我に三寶有り、持して之を保つ。一に曰く慈。二に曰く儉。三に曰く敢て天下の先を爲さず。慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故に能く廣し。敢て天下の先を爲さざるが故に能く成器の長たり。今慈を捨て勇ならんとし、儉を捨て廣からんとし、後にするを捨て先にせんとす、死せんのみ。夫

れ慈なれば、以て戦へば則ち勝ち、以て守れば則ち固し、天將に之を救はんとす。慈を以て之を衛ればなり。」といふに至ては、其の道とする所の要諦を悉して憾無きものであらう。

以上抄出する所によつて老子の教が無我を尙び慈悲を所詮とする大乘佛教の説と契合する所の多いことを見るべきである。其の説はやゝ極端に過ぎたるの観があるけれども形式的虚飾的に傾ける時代の流弊を矯むるに於て大なる效益のあつたことは争はれぬ。たゞ其の所謂「自然」なるものが餘りに茫漠として、吾人が言行一切の目的と規範とを之によつて定むることは頗る困難に思はれる。若し此の「自然」といふ思想を佛陀の具有したまへる大慈悲心の發現といふ點まで進め、其の「自然に復す」といへる理想を更に明確なる信仰的のものに更むるならば、初めて永久の生命ある教として仰がるるに至るであらう。道教の末流が無學なる道士の爲

に漸く變形せられ、全く老子の精神を失ふに至つたのは惜むべきことであるが、老子の所謂天道と自然とが餘りに抽象的のものであつたことも、其の責の一半を分つべきでは無からうか。

斯の如くに觀來る時は、外道及び孔老の教も、共に佛教によつて統一せられて其の不巧の生命を得べきものなることを推するに難からぬであらう。又彼の基督教の如きも、更に數歩を進むる時は大乘佛教の中に歸入せざるを得ぬであらう。基督の教は其の當時に在つては最善最高の教であつたのである。若し舊約全書中に現はれたる古代猶太の宗教思想と、新約全書の中に記されたる耶穌自身の教訓とを比べて見るならば、何人も耶穌の偉大なる人格に驚嘆せざるを得ぬであらう。古代猶太人は唯一の神を信じ且自ら神によつて特別の恩寵を與へられたる國民なることを信じて居た、而も彼等は久しく逆境に在り種々の艱苦を嘗め來つたので、人生の決して

樂觀すべきものにあらざること能く知つて居た。されば彼等の間に發達したる宗教に於ては、人生の艱苦を神によつて與へらるゝ試験とらひあると解し、神によつて約されたる幸福は、淨く雄々しき心を以て此の試験を堪へ得たる後に與へらるべきものと爲すのである。斯くして彼等の神は監視者たり、審判者たる性質を帯び仰ぐべく畏るべき神であつて、懐くべく慕ふべき性質には乏しいのである。耶蘇は猶太に出たれども猶太の宗教に満足せず、自ら新に眞の神を示し眞の宗教を示すべき者として起つた。耶蘇は猶太人が神より特殊の恩寵を與へらるべき國民なりと自信せるを否定し、之を國民的偏見なりと斷じ、神は何人をも同等に愛する者であると教へた。又彼等が神を目し、て盪視者若くは審判者と爲せるを非とし、神は凡ての人を子とし視て、無限の愛を之に注ぐ者であると教へた。而して猶太人が艱苦を堪へて後に得べき幸福を、頗る物質的の意味に解し來つたのを一切否定

し、眞の幸福は決して物質的のものにあらずといひ、人はたゞ神を信じ神を愛することによつてのみ眞の幸福を得べき者であると教へた。神を信じ神を愛する者は、また互ひに相信じ相愛して、不正不義の事は盡く其間より一掃せらるべきである。

耶蘇は即ち教へていふ『人は二人の主に事ふること能はず。そは此を惡み彼を愛み、此を親み彼を疎むべければ也。爾等神と財に兼ね事ふること能はず。是故に我爾等に告げん、生命の爲に何を食ひ何を飲み、また身體の爲に何を衣んと思ひ煩ふこと勿れ。生命は糧より優り、身體は衣より優れる者ならずや。爾等天空の鳥を見よ、稼たくこと無く、糶かること無く、倉に蓄ふること無し。然るに爾等の天の父は之を養ひ給へり。爾等は之よりも大に勝るゝ者ならずや。爾等の中誰か能く思ひ煩ひて、其の生命を寸陰も延べ得んや。又何故に衣のことを思ひ煩ふや。野の百合花は如何にして

長つかを思へ、勞めず紡がざるなり。我爾等に告げん、ソロモンの榮華の極の時だにも其の装この花の一に及ばざる。神は今日野に在りて明日爐に投入れる草をも斯く装はせ給へば、まして爾等をや」と。斯く神に絶對の信を捧ぐることを知れば、常に自ら顧みて神慮に一致せざらんことを恐れ、身心共に淨くして穢無きを得べきである。即ち曰く、「人を議すること勿れ、恐らくは爾等もまた議せられん。爾等が人を議する如く己も議せらるべし。爾等が人を量る如く己も量らるべし。爾兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知らざるは何ぞや。：：：求めよ、さらば與へられ、尋ねよ、さらば逢ひ、門を叩けよ、さらば開かるゝことを得ん。：：：爾等の中誰か其パンを求めんに石を與へんや、また魚を求めんに蛇を與へんや。さらば爾等恵き者ながら善き賜を其子に與ふるを知る。まして天を在す爾等の父は求むる者に善き物を與へざらんや。是故に凡て人に爲られん

と思ふことは、爾等また人にも其如く爲よ」と。

人は私心を去り虚偽を離れ、報を得んとするの念をすて、善を爲さなければならぬ。耶蘇は此事を最も嚴かに教へて、「爾等貧しき者は福なり、神の國は即ち爾等のものなれば也。爾等今餓えたる者は福なり、飽くことを得べければ也。爾等今哭る者は福なり、笑ふことを得べければ也。人の子の爲に、人爾等を憎み、また遠ざけ、罵り、爾等の名を惡として棄なば爾等幸なり。其日には歡び踊れ。爾等天に於て賞賜大なればなり。その先祖が預言者になしたりしも是の如し。爾等富る者は禍なる哉、既に安樂を受くれば也。爾等飽ける者は禍なる哉、餓えんとすれば也。爾等今笑ふ者は禍なる哉、哀み哭んとすればなり。凡ての人爾等を譽めなば爾等禍なる哉、その先祖が偽の預言者になしたりしも是の如し。我に聽く所の爾等に告げん其敵を愛し、爾等を憎む者を善くし、咀ふ者を祝し、惱める者の爲に祈禱せよ。

人爾の頬の右方を撃たば、また左方の頬を向けよ。爾の外服を奪らば裏衣をも拒まざれ。凡て爾に求めば之に與へ、爾の物を奪らば其をまた索むる勿れ。己人にせられんとする事は、また人にも其如くせよ。己を愛する者を愛するは何の賞賜あらんや。惡人にて己を愛する者は愛する也。己に善をなす者に善をなすは何の賞賜あらんや。惡人もまた是の如くならず。爾等償さるゝ事を得んと思ふ人に、貸すは何の賞賜あらんや。惡人も其如く償を得んとて亦惡人に貸すなり。爾等敵を愛し、又善をなし、何をも望まざりして貸し與へよ。さらば、其の賞賜は大なり。且至上者の子とならん。夫れ神は恩を忘るゝ者及び不善者にまで、慈愛を施せばなり。是故に爾等の父の憐憫の如く、亦た憐憫を爲すべし。人を議すること勿れ、さらば爾等も議せられず。人を罪すること勿れ、さらば爾等も罪せられず。人を恕せ、さらば爾等も恕さるべし。人に與へよ、さらば爾等も與へらるべし。

彼等量をよくして、推入れ搖入れ、溢るゝ迄にして爾等の懐に入れん。爾等量る所の其の量にて亦人に量らるべし」といつた。

耶蘇は人々に根本的の覺醒を與へんとして教を説いたのである。されば、『實に爾に告げん、人もし新に生れずば、神の國を見ること能はじ』といつて居る。而して自ら世の人に新なる生を與へんが爲に、神によつて此世に遣はされたる者なることを確信せるが故に、『今我が父は天より眞のパンをもつて爾等に與ふ。神のパンは天より降りて生命を世に與ふるもの也』といひ、更に自ら稱して『我は生命のパンなり、我に來る者は饑えず、我を信する者は常に渴くことなし。されど我爾等が我を見ても信ぜざる事を爾等に告たりき。凡て父の我に與へし者は我に來らん。我に來る者は我必ず之を棄てず。我が天より降りしは、己の意のまゝを行はん爲にあらず、我を遣はし、者の意のまゝを行はん爲なり。凡て父の我に與へし者を、

我一をも失はず」といつた。更にまた「我を信する者は我を信するに非ず、我を遣はしし者を信するなり。又我を見る者は我を遣はしし者を見るなり。我は光にして世に來れり、凡て我を信する者をして暗きに居ざらしめん爲なり。人もし我が言を聞て守らざるとも之を審判かず。我が來りしは世を審判かん爲に非ず、世を救はん爲なり。我を棄て我が言を納れざる者を審判者あり即ち我がいひし言、終りの日これを審判べし。我已よりいふに非ず、我を遣はしし父、我が言ふべきこと、我が語るべきことを命じ給へる也。その命じ給ふ所は即ち限り無き生命なるを我知る。是故に我がいふ所は父の告げ給ふまゝにいへるなり」ともいつて居る。

耶蘇は斯く神によつて此世に送られた者であると自ら確信し、神の教は必ず自己を通して世に弘まるべきことを確信して居た。而して又世の凡ての人の罪を償はんが爲に、自ら彼等に代つて刑を受け、自己の責を果して

父なる神の許へ歸ることを悦んで世を去つたのである。されば其の死に臨んで諸弟子に「我爾に告げん、爾は我と共に樂園に在るべし」といひ、神を呼んで「父よ我が靈を爾の手に託す」といつて息絶えた。其の囚へらるゝに先つて神を呼で、「爾の榮を顯はさんが爲に爾の子の榮を顯はし給へ。これ爾の我に賜ひし所の者に、我が限りなき生命を與へんため凡ての者を制する權威を、我に賜ひたればなり。限りなき生命とは唯獨の眞の神なる爾と、其の遣はししイエス、キリストを知る是なり。我爾の榮を世に顯はし、爾の我に委ねし所の行は我これを爲せり。父よ今我をして爾と共に榮を得させ給へ」といつたのは、よく其の一生の事業を悉せるものである。耶蘇の教は永く不朽なるべき事の多くを含んでゐる。たゞ其の天國と人界とを相對せしめ、靈と物質とを相對せしめて、二元的の説明を與へたのは、一草一本にも佛陀の靈光の宿れるを認め、人々皆佛性を具有せることを

許して、娑婆世界を直ちに化して寂光淨土たらしめんことを理想としたる大乘佛教の所説に比して、甚だ不徹底なるを免れぬ。又神の子たる耶蘇が人の世を淨むべく神によつて送られたとの説は、佛陀が人身を取つて悉達太子と現はれ、修行の範を示し成道の範を示して、言と行とによつて吾等を導きたまへりといふの意義深遠なるには及ぶべくもない。若し基督教にして更に數歩を進むるならば、漸く大乘佛教に近づき來るべきは疑ひなきことである。

妙樂は儒教と道教とが佛法流通の前驅として用を爲したることを説いて、「佛教の流化實に茲に頼る。禮樂前に駆せて眞道後に啓く」といつた。又金光明經には、「一切世間所有の善論は皆此經に因る。若し深く世法を識れば即ち是れ佛法なり」とある。獨り儒道の二教のみならず、一切の教は終に大乘佛經に歸入すべきである。斯く大觀し來れば、佛説ならざる諸

説もまた佛説の一部を成せるものと見て宜いわけである。佛は自ら其の久遠の生命を説き示したまひ、「如來の演ぶる所の經典は皆衆生を度脱せんが爲なり。或は己身を説き、或は佗身を説き、或は己身を示し、或は佗身を示し、或は己事を示し、或は佗事を示す。諸の言説する所は皆實にして虚ならず」(法華經、壽量品)とある。されば何れの教も佛の「常住説法」の一部分であつて、その佗事を示したまへるものに外ならぬのである。宗教は國により時により、その始祖によりて、皆その趣を異にするけれども終に必ず統一せらるべきは疑ひなき事である。本經に所謂「無盡の歸依」は必ず人生の上に實現せらるべきである。

餘論 (廿七)

佛道に入る者は必ず三寶に歸依しなければならぬ。三寶は佛法僧であ

る。佛は救世者である、固より歸依しなければならぬ。而して佛の世を救ひ給ふは說法によるので、法の世に弘まるなければ、佛の世に出たまへる志は成就されぬ。法の貴きこと斯の如くである、歸依しなければならぬ。既に佛あり法ありと雖も、佛の在世は限りあり、法の弘まるに亦た時がある。不惜身命の覺悟を以て、自ら任じて法を弘むる者なくば、何ぞ一切衆生をして永く其の澤に潤はしむることが得られやう。此の大任を果さんことは、一人の力の能くすべき所でない。此に於てか協力一致の要が即ち生ずるのである。佛に仕ふるに於ても、經を誦するに於ても、法を説き教を弘むるに於ても、人々は共に心を一にし力を戮せて之に當らなければならぬ。斯く心を一にして佛法の流布を贊くる者を名けて僧といふ。僧に歸依しなければならぬ。佛の出世あれば必ず法あり、法無くして佛のみ在すといふことは無い。佛と法とは二にして而も一である。法あれば必ず之を信ず

る者あり、之を信ずれば必ず之が流布に力を致す者あり。既に法あつて、僧の無いといふことはない。されば法と僧とはまた二にして一である。斯く觀來れば佛法僧の三者は必ず相伴ふべきもので、三寶は三にして而も一なりといつて宜いのである。斯く三寶は畢竟一であるが、其の本末を論ずれば、佛は本にして僧は末である。佛あつて而る後に法と僧とがあるのである。佛あつて而る後に佛と法とがあるのではない。又僧その者も元來佛に歸依するの念あつて、初めて僧たることを得たのである。故に佛なければ法も無く僧も無い。且又法には佛法あり、外道の法あり、其の正邪深淺幾干といふことを知らぬ。僧にもまた眞の僧あり、僧に似て實は僧ならざる者もある。智度論には四種の僧を擧げてある。一には啞羊僧、二には無羞僧、三には有羞僧、四には眞實僧である。一に啞羊僧とは善惡を辨へず、持戒と犯戒との別を知らず、犯して後に悔ゆることを知らず、猶ほ啞羊の死に至るま

で聲無きが如くなる者をいふ。二に無羞僧とは善惡の別等をよく辨ふれども、内に深く犯戒を羞づるの念無き故に清淨なる戒行を持ち得ざる者である。三に有羞僧とは能く羞づることを知つて、能く戒を持ち行を淨うする者をいふ。四に眞實僧とは能く淨徳を具し衆生を化するの力ある者をいふ。斯の如くに、種々の僧があつて、吾々には何れの僧が果して佛と法とに配し、三寶の一として貴まるべき者なるかを知ることが容易でない。たと佛は眞智を具し萬徳を具したまふ者であるから、法の正邪を分ち僧の賢否を分つには、其の果して佛意に合せりや否やを準據として之を判ずるの外はない。吾等が法に歸依し、僧に歸依するといふのも畢竟これ佛に歸依するに外ならぬのである。佛に歸依するの念がなければ、法と僧とに歸依すといふも、これ眞の歸依と呼ぶべきものではない。若し法を究め理を究むるのみに專にして、佛に歸依するの念乏しいもの

は其の知る所愈々博くして且深きに及んでも、其の心は猶ほ定まる所無きを免れぬものである。蓋し人の世に立つや念ふこと無きを得ず、言ふこと無きを得ず、爲すこと無きを得ぬのである。其の念ふ所、言ふ所爲す所について正邪の別を生じ、善惡の分を生ずる。然れども其の正邪を分ち善惡を分つの標準に至つては、多く茫漠として辨ふる所なく、たと世間の正とする所によつて正とし、世間の善とする所に隨ひて善とするのみである。斯く多數の意見に順應することは、世に處し生を送るのには便益多きが如くであるが、一たび反省深思の要を知るに及んでは、能く周圍に順應し得たるを以て自ら足れりとするとは出来ぬ。何となれば多數の認めて是とする所も、必ずしも久しく頼り得られぬからである。哲人ソクラテスを殺した者はアゼン市民の多數である。大賢孔子を斥けて用ゐなかつた者は魯國の有司の多數である。而もアゼン市民は久しからずして其の過を悔い、魯

の有司は永く後世の人に其の愚を憫まれざるを得なかつた。多数に順ふことは必ずしも安全なる途ではない。茲に於てか善惡正邪の標準について研究を積むの必要を認めざるを得ないのである。

若し縦に數千年の史實を究め、横に東西諸國民の爲す所行ふ所を究めて其間に一貫したる所の者を求め來れば、風俗習慣の差異は千様萬態であつても、其の歸着する所は必ずしも見出し得られぬ筈はない。斯くして見究め得たる所によつて、正邪を別ち善惡を分つ時は先づ過なきに庶幾かるべきである。抑も正とは規矩に合ふの義である、善とは目的に適ふの義である。何を以て人生の規矩とすべきか、何を認めて人生の目的とすべきかを知れば、即ち正邪の別と善惡の分とに於て惑ふ所無かるべき筈である。しかし更に深く考へて見ると、此の規矩といひ目的といふに、相對的なるもあり、絶對的なるもある。其の絶對的なるものに頼るのでなければ、永く安ん

じて行ふことは出來ぬであらう。今こゝにいふが如き研究の方法によつて、果して其の絶對的の規矩を見出し、絶對的に人生の目的を見究め得べきであらうかといふに、それは殆んど望み得べからざる事のやうである。

何となれば此の研究は要するに歸納的研究に過ぎぬからである。歸納的研究より生み出されたる結論は、たゞ「此事は可能なり」といふより以上に出ぬものである。如何に汎く事實を究め、如何に徧く材料を求むるとも其の數には固より限りがある。「既往に於て斯の如し、將來もまた然るべし」といひ「既に見たる所に於ては皆斯の如し、未だ見ざる所に於ても亦然らざるを得ざるべし」といふ以上に、絶對的なる斷論を下し得べくもない。幸にして斯る結論に對して、何等の疑惑をも感ぜぬ間に於ては、其の結論は殆んど絶對的の價值を有すべきであるが、若し之に對して疑惑を生じ之に服従するを好まぬやうな情を抱く者にあへば、「汝の疑惑は全く不合

理なり、汝の之に服従し難きは汝の私心なり」と断言し得べき權威は有し得られぬのである。歸納的研究に斯る弱點のあることを知る者は、更に別箇の途に向つて其の標準を求めんとするであらう。そこで考へて、見ると事實を究め經驗に基いて作られたる結論は、要するに外よりして吾が心に投げ與へられたるものに過ぎぬ。此の如きものが吾が心に絶対の權威を有し難きも、更に怪むべきことではない。吾が心を永く支配し得べきものは、吾が心の底より生れ出たる者でなければならぬ。深き根柢を内に有せずして、何ぞ大なる力を具へ得られやうと。

茲に於てか「内に省みて疚しき所なき行を以て、即ち正と爲し、即ち善と爲す。たとへ千萬人の吾を非とするあるも、心に疚しからずんば何かあらん」との主張が生ずるのである。此の主張は其の根柢を自己の内界に置けるだけに、また極めて大なる力をもつてゐる。古來大事に當つて能く其

の任を果し、艱難を経て屈する所の無かつたものは、孰か斯の如き自信の上に立たぬ者があらう。されば吾々は自己の行ひに就て自己の内界に確乎たる根柢を持たなければならぬといふことは、人間の歴史を心讀したる者の共に認むる所である。しかしながら靜かに各自の平生に就て反省する時は、斯の如く一概に論斷し去ることに、亦た多くの危険を感ぜざるを得ぬのである。人生は決して單純なるものでなく、周圍の事情は甚しく複雑し、吾々各自の思想も極めて複雑である。複雑せる思想を以て複雑せる事物の中に立つ吾々が正しく向上の一路を認むること、何ぞ容易の業といはれやう。自ら固く信じて行つたこと、後に至つて願れば往々にして過誤あるを免れぬ。また自ら非として斥け去つた所に、或は却て採るべき所のある場合も少くない。されば「内に省みる」といひ、「吾が心に問ふ」といつても、いかに自ら省みるべきか、いかにいて吾が心に問ふべきかに就いて

疑惑を生ぜざるを得ぬのである。斯の如くにして吾等の行爲の標準を外に求めんとする者と、之を内に求めんとする者と、共に一長一短あり、之を決すること極めて困難なることを互ひに自覺せなければならぬので、こゝに哲學の要求を生ずるのである。中庸には、「誠は自ら己を成すのみに非ず、物を成す所以なり。己を成すは仁なり、物を成すは知なり。性の徳なり。外内を合するの道なり。故に時に之を措きて宜しきなり。故に至誠は息む無し、息まざれば久し、久しければ徵あり、徵あれば悠遠なり、悠遠なれば博厚なり、博厚なれば高明なり。博厚は物を載する所以なり、高明は物を覆ふ所以なり、悠久は物を成す所以なり。博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆無し。此の如きは見えすして章れ、動かずして變じ、爲すこと無くして成る」とある。是れ自己の精神を一貫せる原理と、天地萬有を一貫せる原理とを原ねて之を一の「誠」に歸

し、之を以て各人行爲の絶対標準と爲さんとするものである。故にまた「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」ともいつてある。是れ實踐道徳を主とせる孔子の教が、更に歩を進めて哲學的基礎を定むるの必要を生ぜることを證するものではないか。

彼の歸納的研究によつて行爲の標準を定めんとする者の缺點は、其の論斷がたゞ可能的に止るに在る。之をして更に絶対的の意義を有せしめんとすれば、有限なる事實を一貫する無限の力を認め、變化極りなき世相の底に潜める不變の原理を求めて、之を其の論斷の基礎としなければならぬ。斯の如きは即ち形而上的の事で、即ち哲學の領域である。又自己の心上に有らゆる行爲の標準を求めんとする者も、其の標準が自己の行爲を規制するのみならず、同時に凡ての人の行爲を規制すべき力あるものでなければ、如何して自ら安んじて之に頼ることが出來やう。カントは「自己心中の

規箴が同時に萬人に通ずべき原理たるべきものを、正しき行爲とす」といつた。此の如き原理を求めんが爲には、先づ自己の心中に就て其の變化常なき種々の所念と、永恒不變なるものを分ち、又此の不變なるものが獨り自己の一心に於て不變なるに止まらず、萬人の胸裏に同じく儼（中略）として存在するものなることを確めなければならぬ。是れまた形而上的の事であつて、即ち哲學の領域である。斯くして客觀的事實を基礎とせる研究の結果と、主觀的精神作用より出發せる考察の結果とが相一致し、こゝに内外を一貫し、主客觀を包容する所の根本原理に究め到りたる時はじめて一の哲學説が成立するのである。シヨールペンハウエルは、「人は哲學的の動物なり」といつたが此の言は簡なりと雖も甚深の意義を含んでゐる。人は極めて稚い時から日々見聞する所の事物に對して、必ず疑問を生じ、必ず「何故に」と問はぬものはない。此の「何故に」は一たび或る解決を得ても、又更に新な

る「何故に」を生じ、其の究竟の解決を得ざる間は、眞の満足を感じずるものではない。

既にいへるが如く、正とは規矩に合ふの意である。善とは目的に適へるの意である。吾々が日常生活の間に定むる、正邪の別と、善惡の分とは種々多様なものである。正しき言語といひ、正しき作法といひ、善き仕事といひ、善き動作といふが如きの類は數へられぬ程である。而も其の凡ての正邪の規矩たるべき絶對的の規矩や、凡ての目的を統一すべき絶對的の目的を定め得なければ、個々の事物についての正邪善惡の區別は常に動搖すること免れぬ。「吾等の生くるは何の爲なりや」といひ、「生くるとは要するに何を意味するや」といひ、「吾等の營む人生の歸着する所は何なりや」といふが如き根本的の疑問の解決は、吾等が日々の一舉一動に切實なる關係を有するものである。斯れば何れの國民と雖も、其の文明の程度の進歩せ

るものにして、哲學を有せぬものは決してない。或は「天」といひ、或は「道」といひ、或は「自然」といひ、或は「本體」といひ、或は「實在」といひ、或は「最高原理」といひ、その名は種々に異つてゐるけれども究竟的、絶對的なる何者かを認めて、以て凡ての研究と實行との根本的基礎としやうと努むることは即ち一である。

哲學は斯る必然の要求よりして生れたのであるから、人間の身心一切の活動に其の基礎を與ふべき職分を有するものである。然るに吾等が生を營むこと既に久しきに及んでは、吾等の精神活動の分化著しくして、其の智的要求は實行的要求と殆んど分離して（全く分離することの出來得べきやうは無いが）發達するに至つた。茲に於てか科學に於ても純粹理論的の科學と、應用的の科學との分立を來し、理論的研究は實用如何を顧慮すること無く、自由に其の歩を進むるやうになつた。是れまた人類必然の要求に共

の根據を有するものであるから其自身に充分の價值あるものであるけれども、社會生活に於ける直接的効果に至つては頗る疎い。哲學もまた此の機運の中に於て育せられ、専ら智的要求に應ずべき性質を強め、情熱の之に伴ふことを許さずして、其の發達を遂げ來つたる觀がある。是れ固より人類に必然なる智的要求を充すべき最も高尚なる職分を果すものであつて決して輕視せらるべき理由はない。けれども智的作用と情意の作用とは、固より其の性質に於て相同じからぬ所がある。概していへば智識は微を究め細を析つて進み行くものである。情意は之を渾融し同化して直ちに實行に移さんとするものである。一は分解的に於て長じ、一は綜合的に於て長ずるのである。されば哲學が専ら理論的のものとなつて其の發展の路を取れると共に、其の研究は益々分解と剖析とに於て長所を發揮し、問題は更に問題を生み、底止する所を知らぬやうになつた。されば吾等の生活

に統一を與へ、吾等の日常相接する所の事物に一々深い意義を見出し、満足なる一生を送らんといふが如き實際上の要求に應ずるには、あまりに高遠にしてあまりに空疎なるの觀あるを免れぬに至つたのである。

宗教は實際的要求よりして發達し來れるものであるから、常に有らゆる問題を統一し、有らゆる思想を渾融するの作用を主として、其の地歩を占め來つたのである。されども智的要求と情意の要求とは決して互ひに孤立するものではない。自然及び人生に關する幾多の疑問は、日常生活上の方針を定むる上に絶えず影響を及ぼさざるを得ぬ。故に確乎たる哲學的基礎を有せざる宗教は永く其の生命を保ち難きものである。たとへ信仰を求むる人の凡てが哲學上の問題を有せずとも、宗教その物の本性としては如何なる人をも救濟せねばならぬものであるから、如何なる深刻なる疑問を提げ來る者に對しても、之が解決を與ふるだけの實を己に具有せなければ

ばならぬのである。佛教は此點に於て、基督教其他の諸教に比して最も優秀なる地位に立つものといへるであらう。佛教に於ては智慧を離れて信仰に入れよといはず、専ら感情の上のみに其の立脚地を定めんとは努めず、信と慧との渾然として融合せる所に、その理想を立つるものである。

さはれ其の終極の目的は、満足なる生を送り、あらゆる苦惱と罪惡とより脱し去るのに在るから、冷靜なる智的討究を詮要とすべきものではない。たとへ科學的、哲學的の討究攻究を試むるにしても、それは信仰を決定すべき爲の路程として其の價值を認むべきである。故に佛陀の慈悲に對して歸依渴仰の念を致し、吾等の心を照したまへる其の大慈悲の光を受けて、吾等の具有せる佛性を長養せんことを所詮とすべきは勿論の義である。哲學は理性の満足の主とするが故に、「最終の原理」に向つて、其の研究の歩を正確に進め行くを以て足れりとし、其の一步よりは一步と眞理を捉ふるこ

との正確ならんことを努めて止まぬ。宗教は生活の満足を詮要とするが故に、絶對の眞理の體現者たる佛陀の境界に近づかんことを努めなければならぬのである。『吾は何のために存在するか』『吾が生存は何を意味するか』等の疑を解くには、勿論佛の吾等に與へたまへる至上の法に依るの外はなけれども、哲學者が先人の學說を研究すると同じき態度を以て之を研究するのではない。此の法の中に宿れる佛陀の無量の智慧と無限の力と、無邊の慈悲とを渴仰するの念を以て之を究むるのである。而して佛陀の光に照されて、吾が智的作用と情意の作用とが融和一致して能く向ふ所を誤らず、煩惱の闇を除いて能く覺を成じ徳を成ずれば、佛弟子たるの願はこゝに達せられたるに庶幾きものである。

餘論 (廿八)

諸經論の中に擧げられたる十方世界の諸佛の名は殆んど無數である。而も吾等娑婆世界に住する者は此等諸佛の何れにも値遇し奉ることは出來ぬ。吾等の値遇し奉れるはたゞ一の釋迦牟尼佛あるのみである。法華文句には釋迦牟尼を釋して應身佛の義としてある。蓋し佛の具有したまへる無上至尊の性を名けて法身、或は自性身といひ、其の修行を積んで成就したまへる智慧を名けて法身、或は受用身といふのである。而して其の一切衆生に施したまふ慈悲を名けて應身、或は變化身といふ。應とは衆生の苦を脱せんと求むるのに應じて現はれ、之が爲に解脱の道を示したまふの義である。變化とは其の宜しきに應じて種々變化して法を説き益を與へたまふの義である。即ち、「智と體と冥かまひ能く大用を起し、機に隨ひて普く現じて説法利生す、故に應身と名く」とある。而して「釋迦牟尼」の名を釋して「能仁寂默」と爲し、更に之を解いて「寂默の故に生死に住せず能

仁の故に涅槃に住せず」とある。寂黙とは能く煩惱を断ち盡して涅槃の境に達し得たるをいふのである。能仁とは一切衆生の苦海に淪没せるを感んで之を濟はんとするの志を絶たざるをいふのである。既に寂黙なるが故に生死の縛の外に立ち得ること勿論である。而も能仁なるが故に、自ら涅槃を得たるに安んぜず、一切衆生の爲に深く心を勞したまひ、彼等の中に混じて共に苦を受けつゝ、之を救護せんとして力を盡さるゝのである。法華經神力品に、十方世界の衆生が此の娑婆世界に向つて釋迦牟尼佛を禮拜せることを記して、「即時に諸天、虚空の中に於て高聲に唱へて言く、此の無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過ぎて國あり、娑婆と名く。是の中に佛あり、釋迦牟尼と名け奉る。今諸の菩薩摩訶薩の爲に大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ。汝等當に深心に隨喜すべし、亦た當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし」と。彼の諸の衆生、虚空の中の聲を聞き

已りて、合掌して娑婆世界に向ひ、是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。種々の華香、瓔珞、旛蓋、及び諸の嚴身の具珍寶妙物を以て皆共に遙に娑婆世界に散ず。所散の諸物、十方より來ること譬へば雲の集るが如し。變じて寶帳と成りて徧く此間の諸佛の上に覆ふ。時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し」とある。是れ釋迦牟尼佛が斯く苦惱に充ちたる娑婆世界に出現して法を説き、一切衆生をして共に斯る苦惱を脱せしめんと努めたまへる、洪大無邊の慈悲に對して、十方世界の衆生が悉く崇敬渴仰の念を發せることを示すものである。而して「十方世界通達無礙にして一佛土の如し」といへば娑婆世界と他の世界との區劃はこゝに撤せられたのである。是れ即ち一切衆生が共に佛性を開發し、娑婆世界が化して淨土と爲るべき理想は必ず實現せらるべきものなることを證するものである。

釋迦牟尼佛の慈悲は斯の如くに洪大無邊である。然れども若し一切衆生の心性に、其の教を信じ、之を其身に體して向上進歩を謀るべき力が具合せぬならば、其の洪大する慈悲も竟に其の效なくして已むべきである。れば「一切衆生悉有佛性」といひ、「汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし」といふが如き語は、吾等に大なる希望を與へ、大なる悦びを與へ自ら重んじ自ら敬すべきことを教ふる語として、尤も貴むべきものである。而も釋尊は之を教ふるに言説を以てしたまへるのみならず、自ら淨飯王の子として生れ、自ら多くの苦悶を経、多くの煩悶を重ねて出家し、自ら難行苦行の數を積みて成道を遂げたまひ、「汝等また斯の如くなるを得べし」との實例を示されたのである。大莊嚴等の諸菩薩が聲を同うして「我復た咸共に俱に稽首して、能く諸の勸めたまへるに歸依し奉る」といつたのは、實に之が爲である。斯れば吾等凡夫と雖も勸めて已まざれば必ず

佛と成り得べきことを知るべきである。而も一たび佛と成り畢れば、何れの佛も全く同等にして、其間に何等の差異なきことは既に屢々説ける所の如くである。

斯の如き高遠なる教を吾等に與へたまへる釋迦牟尼佛は、如何にしても偶然此の娑婆世界に出現したまへるものと考ふことは出来ぬ。即ち此の釋迦牟尼佛は唯一絶對なる本佛の身を分つて此の娑婆世界に出現せられたるものであるとの説の生じ來つたのは、是れ極めて自然なる歸決といはなければならぬ。されば華嚴經に於ては毘盧遮那佛を以て絶對の本佛とし、其の身を分つて十方世界に現はれたまへる佛の數の無限なる中に於て、吾等の住する娑婆世界に出現したまへるものを釋迦牟尼佛なりとしてある。又大日經等に於ては、大日如來を以て絶對の本佛と爲し、釋迦如來を以て其の分身佛の一としてある。其他諸經に於て説かるゝ所は種々相異

るけれども絶対なるものに二三あるべき理は無い。要するに唯一なる本佛を種々の方面より種々に観察し、種々に説明して種々の名を命じ、種々に其の功德を述べて、衆生の信仰を深めしめんとしたのである。而して法華經壽量品に至つては、釋尊自ら本佛が人身を取りて娑婆世界に出現したる者なることを告げられてある。此に於てか釋尊一代の事蹟は其の誕生も、其の出家も、又其の成道も、其の化導も盡く是れ吾等衆生を濟ふべき爲に、本佛の取りたまへる方便に外ならぬことが明になり、吾等は絶対の信仰を釋尊に捧げ奉らなければならぬといふことも明になつた。大乘起信論には釋尊一代の事蹟を案じて、八相を立てた。八相とは一に降兜率、即ち兜率天より娑婆世界に降下したまふこと。二に入胎、即ち摩耶夫人の胎に入りたまふこと。三に住胎、即ち胎内に在つて諸天の爲に說法したまふこと。四に出胎、即ち四月八日藍毘尼園にて誕生したまふこと。五に出家、即ち世の

無常を觀じ玉宮を出て入山學道したまふこと。六に成道、即ち菩提樹下に成佛得道したまふこと。七に轉法輪、即ち五十年間法を説いて普く人天を度したまふこと。八に入滅、即ち八十歳にして沙羅雙樹の下に入滅したまふことである。斯くて人身を取つて吾等の前に現はれたまへる佛は入滅ありたれども、佛其者の常住に在すことはいふにしも及ばず。「常住此說法」の語以て證とすべきである。

餘論 (廿九)

佛智を本經に稱して「是れ出世間の上々智」といつてある。世間の事は悉く相對である、悉く集散離合の範を出難きものである。世間に在つて世間に囚はるゝ者の見る所は固より眞でない。されども斯る相對的のものに囚はるゝこと無きに至れる聲聞緣覺の智も、また未だ眞の出世間と

稱せらるべきものではない。何となれば彼等は自ら世間を出たる者として、世間に囚はるゝ者と相對してゐるので、是れ未だ世間より以上に出難き者である。若し世間と相對せずして之を包容し、世間に囚はるゝ者と相離れずして、之を其の子として視て、救護を與へたまふこと佛陀の如くなるに至れば、こゝに初めて出世間の名に値すべきである。されば眞に出世間の智を具する者にして、初めてよく世間を救護すべきである。未だ佛智を具ふるに至らずとも、之を以て其の志とし、努めて已まぬならば漸く世間を救護するの力を具へ來るべきである。

金剛經に六祖の口訣あり、天台の羅適が之に序せる中に、「心は念慮の在る所なり、神識の舍る所なり、眞妄の共に處る所なり。凡夫と聖賢との等しく會するの地なり。……諸佛は惟人をして此の心を了らしむ。此の心了りぬれば即ち自性を見る、自性を見るは則ち是れ菩提なり。此れ性に在

るの時は皆自ら空寂にして湛然たり、緣無きが若し。念を生ずること有りて而して後に有なる者なり。……妙用は即ち是れ吾が圓寂に在る時の眞我なり。形の物に遇ふに因るが故に、之を作爲に見はすのみ。但だ凡夫は迷ひて物を逐ひ、聖賢は明にして物に應ず。物を逐ふ者は彼に自ひ、物に應ずる者は我に自ふ。彼に自ふ者は所見に著す、故に輪廻を覓む、我に自ふ者は當體常に空にして、萬劫一の如し。合して之を觀れば、皆心の妙用なり。是故に其の未だ生ぜざるの時に當りては、所謂性は圓滿具足して、空然として物無く、湛乎として自然なり。その廣大なること虚空と等しく、往來變化一切自由なり。天我に命ずるに生を以てすと欲するも、其れ得可けんや。天も猶ほ我に命ずるに生を以てすること能はず、況んや四大に於てをや、況んや五行に於てをや。既に念を生ずること有れば、又緣を生ずること有り。故に天は生を以て我に命ずることを得、四大も氣を以て我を形することを

得、五行も數を以て我を約することを得。此れ生ある者の滅ある所以なり。然れば則ち生滅は一ひとに凡夫に在り、聖賢の生滅する所以は則ち殊なり。凡夫の人生は念に縁よりて有なり、識は業に隨て變ず。習氣薫染して、生ずるに因りて愈甚し。故に既に生ずる後、心は諸妄に著す。妄りに四大を認めて以て我が身と爲し、妄りに六親を認めて以て我が有と爲し、妄りに色聲を認めて以て快樂と爲し、妄りに塵勞を認めて以て富貴と爲す。心に自ら知見すれば、妄ならざる所無し。諸妄既に起れば、煩惱萬差なり。妄念眞を奪ひて、眞性愈隱る。人我を主と爲し、眞識を客と爲し、三業前に引き、百業後に隨ふ。生死流浪して涯際あること無し。生盡れば則ち滅し、滅盡れば復た生じ、生滅相尋たずで諸趣に墮するに至る。(諸趣とは地獄、餓鬼、畜生、修羅等の諸道をいふ。)諸趣に在りて轉々として知らず、愈々無明を恣にして諸の業の罟おを造り、遂に塵沙の劫盡るに至れども、人身には復たらず。

聖賢は則ち然らず。聖賢の生は念に因らず、迹に應じて生ず。生れんと欲すれば則ち生れ、彼の命を待たず。既に生じて後も、圓寂の性は舊に依りて湛然たり。體相も無く罣碍も無し。其の萬法を照すことは、青天白日の毫髪も隱滞無きが如し。故に一切の善法を建立して沙界に徧くするも其の少きを見ず、一切衆生を攝受して寂滅に歸せしむるも以て多しとせず。之を驅れども來すこと能はず、之を逐へども去らしむること能はず。四大に託して形と爲し、五行を養と爲すと雖も、皆我が假る所なり、未だ嘗て妄りに我縁を認めず。苟くも我が迹盡くれば、當に滅委して去るべし。來るが如くにして去るのみ、我に於て何か與よらんや。是故に凡夫には生有りて則ち滅あり、滅すれば生ぜざること能はず。聖賢は生あり亦た滅有るも、滅すれば眞空に歸す。是故に凡夫の生滅は身中の影の如し、出入相隨ひて盡るの時あること無し。聖賢の生滅は空中の雷の如し、自ら發して自ら止む。

物に累さるゝことなし。世人は生滅の此の如くなることを知らず、生滅を以て煩惱の大なる患と爲す、蓋し自覺せざればなり。覺れば則ち生滅を見ること身上の塵の如し、當に一たび振はんのみ、何ぞ能く我が性に累せんや。昔し我が如來、大慈悲心を以て、一切衆生の迷錯顛倒して生死に流浪すること此の如くなるを憫み、又一切衆生は本より快樂自在の性有りて、皆修證して成佛す可きを見て、一切衆生盡く聖賢の生滅を爲して凡夫の生滅を爲さざらんことを欲す。猶ほ一切衆生、無始より以來流浪すること日久しく、其の種性に差ちがひて、未だ一法を以て速に悟らしむること能はざるを慮るが故に、爲に八萬四千の法門を説く。法門入る可く、皆眞如の地に到る可し。一の法門を説く毎に、丁寧の實語に非ずといふこと無し。一切衆生をして各所見の法門に隨て、自の心地に入り、自の心地に到り、自の佛性を見、自身の佛を證して、即ち如來に同じからしめんと欲す。是故に如來の諸經に於て

有と説くは、一切衆生をして相を觀て善を生ぜしめんと欲してなり。無と説くは、一切衆生をして相を離れて性を見しめんと欲してなり。説く所の色空も亦た、復た是の如し。然れども衆生は執着し、有と見るも眞有に非ず、無と見るも眞無に非ず、其の色を見、空を見るも皆是の如くに執着す。復た斷常の二見を起して、轉た生死の根帯を爲す。示すに無二の法門を以てせざれば、又將に迷錯顛倒して生死に流浪することは前よりも甚しからんとす。故に如來爲に大般若法を説きて斷常の二見を破し、一切衆生をして眞有眞無、眞色眞空、本來無二にして亦た人に遠からず、湛然寂靜にして只だ自己性中に在ることを知らしむ。但だ自己の性の智慧を以て諸妄を照破すれば、則ち曉然として自ら見ゆ。：：：法を以て法と爲し固く守りて執著すれば、遂に法の爲に縛せられ、死するまで解くことを知らず。猶ほ沙に陷るの人、力をもて沙と争へば、愈々力を用ひて愈々陷るが如し。沙と争ふこ

と勿ければ即ち能く陥るより出づべきことを知らず。良に惜むべきなり』とある。

人々能く斯の如き心を以て道を學び、斯の如き心を以て世に立てば世に在つて世の爲に累せられず、世を出て世と相絶つこと無く、以て能く如來の化導を賛けて、自ら徳を成じ善を積み得べきである。

餘論 (卅)

經にいはく『心に決定を得たる者は能く信解す。此れ則ち聖諦の義に二あることを信解すればなり』と。二ありといふは即ち大乘と小乗との別あるをいふのである。生死を離れて涅槃を得、煩惱を去つて正智に達することが、是れ即ち佛教の所詮であるけれども、生死と涅槃と煩惱と正智との間に嚴なる區劃を作つて、互ひに相類せぬものゝ如くに解するは決して正

しき見解ではない。此の如くに解して修行を積むものは、一切の累を絶つてたゞ獨りを善くせんとする阿羅漢の徒たるに止るのみである。阿羅漢の徒の煩惱を断ぜるといふは、眞に煩惱の根を断ぜる者でないことは前に委しくいつた。されば其の到達し得たる涅槃は所謂『有餘の涅槃』である。大乘に於て教へらるゝ涅槃は『無餘の涅槃』である。是れ則ち煩惱の根を絶ち盡して到達し得たる境界である。此を本經には特に稱して『自力を以て』といつてある。阿羅漢の涅槃は自力を以て得たものではなく菩薩道を行じて得たる涅槃のみが自力を以て得たるものだといふのである。しかし阿羅漢にせよ、乃至は菩薩にせよ、佛の興へたまへる教によつて惑を除き覺を成ぜる者ではないか。さるを獨り菩薩に於てのみ自力といふは如何。

他無し、是れ其の本來具有せる佛性の發揮に依るものなるが爲である。

既にいへるが如く煩惱の根本は小き自己に囚はるゝよりして作られるのである。たとへ名利の念を去り、欲望と執着とを去り盡せりとも、他と我とを相對立せしめて、我が悟れるを以て自ら高しとし、他の惑へるを卑しみ視るの念のある間は、なほ人我の見を免れぬものである。たゞ大なる慈悲心を發し、彼の惑へる者に對して深く之を哀愍し、これを包容し教化して、吾等と共に菩提を成ぜしめんことを念とするに至つて、初めて能く人我の見を打破し、煩惱の根を斷ぜる者と稱せらるべきである。布施を以て菩薩行の第一に置かれたのも、亦た此意によつて之を推すべきである。彼の薩埵王子が身を以て餓虎に施し、之によつて佛果を得たりとの傳説の如きは、布施の功德を示すに於て憾無きものである。虎は惡獸である、凶暴比無きものである。而も其の餓えて甚しく困ぜるを見ては、深く之を愍み身を捨て以て其の饑を救はんとするは、慈の至ではないか。惡獸すら之を愍じ、况んや

人をや。之を救はんが爲には、身命をすら惜まぬ、况んや力を盡し心を盡すことをや。此の心を以て世に立ち人に對すれば、世に讎敵として視るべき者はない筈である。何ぞ特に「爾の敵を愛せよ」といふの要があらう。初めより敵とし目すべき者はないのである。

俱舍論には四種の善惡を數へてある。其の善といふは一に勝義善、二に自性善、三に相應善、四に等起善である。此の四種の善と相反するを、即ち四種の惡とするのである。一に勝義善とは即ち涅槃である、涅槃に到るものは全く惡を作さぬので、譬へば無病の體の如くである。二に自性善とは慚と愧との二、及び三善根である。慚とは自ら顧みて其の足らざるを感ずるをいひ、愧とは他に對して自身の過を羞づるをいふ。三善根とは無貪と、無癡と、無瞋とである。此の五法は他の事と相應するを俟たずして自ら善なる故に自性善といふのである。譬へば猶ほ良藥の如きものである。三に

相應善とは慚愧と三善根との心を以て物に應じ、行を勤め法を信じて怠らぬといふ。譬へば猶ほ水の如く、よく自ら養ひ又他を養ふものである。四に等起善とは身と心とに過無きを期するをいふ。自性と相應との二善より等しく起つて此を致す故に等起善と名くるのである。猶ほ良牛より出たる良乳の如きものである。斯く諸種の善を分つて考へるのは、己を修めて佛陀の境に達すべき努力を重ねる上に益する所少からぬことであるが、其の諸善の歸着する所は即ち一でなければならぬ。大乘義章には「順を名けて善と爲し、違を名けて惡を爲す」とある。然らば順とは何者に順ふをいふのか。或は理に順ふといひ、或は道に順ふともいふ。而して理の生ずる所、道の立つ所の本を求むれば、佛性の一に歸せざるを得ぬのである。此の究竟の道を示すものを聖諦といふ。此に達すべき爲に方便の説を立てられたのにも亦聖諦の名を冠すれども、それは眞の聖諦ではない。されば

二の聖諦あることを辨へ知る者は、終にその二を離れて一に歸すべきことをも知らなければならぬ。眞に佛弟子と稱せらるべきは、たゞ大乘に歸依する者に限るのである。

餘論 (卅一)

觀普賢經に彌勒菩薩と長老迦葉及び尊者阿難が佛に問ひ奉れる所を記して、「時に三大士異口同音にして佛に白して言さく、世尊、如來の滅後に云何にしてか衆生、菩薩の心を起して大乘方等經典を修行し、正念に一實の境界を思惟せん。云何にしてか無上菩提の心を失はざらん。云何にしてか復た當に煩惱を斷ぜず五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除することを得、父母所生の清淨の常の眼にして、五欲を斷ぜず、而も能く諸の障外の事を見るを得ん」とある。

人生の諸罪は煩惱によつて起ること言ふを俟たず、煩惱は五欲によつて促されて發するのである。されど諸罪の怖るべきが爲に、五欲を厭離せんとするのは想の到れるものではない。五欲を厭離せんとすれば、五根を厭離しなければならぬ。而も五根その物に何の罪惡があらう。覺者にも眼耳鼻舌身あり、惑者にも眼耳鼻舌身あり。眼耳鼻舌身が罪を作るのではなく、眼耳鼻舌身をして罪を作らしむるの本があつて存するのである。譬へば巨石を右に一丈も轉ずる力があるならば此の力の方向を轉ずれば、之を左に一丈も動すことが出来る筈である。吾等を墮落の路に誘へる身心の力は、之を轉ずることによつて、吾等を向上の路に進ましむる力たらしめられぬであらうか。吾等に煩惱を作らしめた力は、やがて吾等の正智を成就する爲の力とはなり得ぬであらうか。是れ迦葉等の特に釋尊に向つて問ひまつれる所である。

釋尊の之に對して教へられし所は、尤も其の要を得たるものである。先づ眼根については、『若し眼根の惡有りて、業障の眼不淨ならば、但だ當に大乘を誦し、第一義を思念すべし。是を眼を懺悔して諸の不善業を盡すと名く』とある。次に耳根については、『耳根は亂れたる聲を聞きて和合の義を壞亂す。是に由りて狂心を起すこと、猶ほ痴なる猿猴の如し。但だ當に大乘を誦して、法の空無相を觀ずべし。永く一切の惡を盡して、天耳を以て十方を聞かん』とある。次に鼻根については、『鼻根は諸香に著して、染に隨ひて諸の觸を起す。此の如き狂惑の鼻、染に隨ひて諸塵を生ず。若し大乘經を誦し、法の如實の際を觀ぜば、永く諸の惡業を離れて、後世に復た生ぜじ』とある。次に舌根については、『舌根には五種の惡口の不善業を起す。若し自ら調順せんと欲せば、應に勤めて慈悲を修し、法の眞寂の義を思ひて諸の分別の想無かるべし』とある。次に心根については、『心根は猿

猴の如く、暫くも停ること無し。若し折伏せんと欲せば、當に勤めて大乘を誦し、佛の大覺の身と力と無畏との所成を念じ奉るべし」とある。次に身根については、「身は爲れ機關の主にして塵の風に隨ひて轉ずるが如し。六賊(六根より生ずる惑をいふ)中に遊戯して、自在にして罣礙無し。若し此の惡を滅して永く諸の塵勞を離れ、常に涅槃の城に處り、安樂にして心澹泊ならんと欲せば、當に大乘經を誦して諸の菩薩の母を念ずべし。無量の勝方便は實相を思ふに従ひて得らる」とある。佛の眞實の教は菩薩をして覺を得しむるものなるにより、之を呼んで菩薩の母といふのである。

更に之を收束しては、「此の如き等の六法を名けて六情根と爲す。一切の業障の海は皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を思へ。衆罪は霜露の如く、慧日能く消除す。是故に至心にして六情根を懺悔すべし」といつてある。之を本經に説かるゝ所と併せ觀て、佛の眞意の在

る所を推すべきである。一切の妄想は皆智慧の乏しきよりして生ずる。此の妄想によつて眼耳鼻舌心身を使役し、種々の業を作し種々の罪を生じ來るのである。その罪は決して眼耳鼻舌等の末に在るのではない。罪の繁多なるのは猶ほ露の如く、固より數ふるに勝へぬ程である。而も一たび日輪の照すにあへば、無數の露は盡く乾くのである。智慧の日よく心の闇を照せば、衆罪は霜露の如く盡く消失すべきである。然らば如何にして智慧の日を耀すべきであるか、他無し、各人に本來具有せる佛性を開發長養せしむるの一途あるのみである。

之が爲には修行の難多きを厭ふべきでない。既にいへるが如く、眞の智慧なるものは事物の眞相を照すの力である。又清淨の行を生ずべき源である。世俗の所謂智識の如く、理解若くは推理の力の發達したのみをいふのではない。されば讀誦多聞を務め、講說論議を重ねたりとて、たゞ此等の事

のみによつて智慧の成熟せんこと到底望まらるべくもない。或は布施に力を致し、或は持戒の堅固ならんを期し、或は忍辱の實行に苦心する等、種々無量の努力を累ねて然る後に智慧の成就を見得べきである。而して此等の善業は大乗の教を信ずるによつて即ち善くすべきことである。大乗の教を信ずるは、實に佛に歸依し奉るの誠心を基としなければならぬ。佛は一切の煩惱を離れ盡して自性清淨なること、本經に示さるゝが如くなれば、吾等が佛を信じ奉り、佛の有したまへる力が吾等の心に感應し來るに於ては、之によつて慧日漸く明に耀き、衆罪の霜露漸くに消失せんこと更に疑ふべからざるものである。

餘論 (卅二)

如來の法身は煩惱を離れ盡せるものである。如來藏は煩惱を離れざる

ものである。而も如來藏と如來の法身とは共に世間、出世間の一切萬法の基だといふ。此の説は頗る解し難きものゝ如くであるが、之を解せんが爲に、先づ有空中の三觀より説き來るとしやう。

凡そ事物を観るに三種の見方がある、其の一は有の觀なり、其の二は空の觀なり、其の三は中の觀である。有といふは差別觀なり、空といふは平等觀なり、中といふのは差別と平等とを綜合せるものである。先づ吾等の智識なるものゝ成立つのは、事物を比べ合せる所からして生ずるものである。吾等が日常の行爲も亦さうである。彼と我とを分ち、前と後とを分ち、是非善惡を分ち、利害得失を分つこと無くば、一舉手一投足すら爲し得ぬであらう。此の如きは盡く差別觀であつて、差別無ければ、要するに人生は成立たぬのである。然れども吾等は差別に囚はるゝが故に、たゞ差別のみを以て事物の真相を盡せりと爲し、別に平等觀なるものゝ存在することを知らぬ

のである。我に執して彼を排し、利を求めて害を避け、得れば驕り失へば恨み、紛々擾々として底止する所を知らぬのである。

茲に於てか達識の人の空觀を教へて之を濟はんとする者が起るのである。空觀は無差別觀である、平等觀である。人々が其の小なる自己に囚はれて彼此を分ち得失利害を分つの妄なる所以を示し、斯る差を超越せる所に、眞の安樂の天地あることを教ふるものである。譬へば水に波瀾あれば月影が繚亂するけれども、波無くして水平なれば、月影即ち全きが如くである。但し平等觀に立つ者が全く差別を忘れてはならぬので、たゞ其の差別に囚はるゝを非とするのである。若し能く囚はるゝこと無ければ、差別の中に在るとも、何ぞ其の弊を受くることがあらう。こゝに面白い傳説がある。一老婆の少女と共に閑居せる者があつて、深く佛に歸依して居た。一日年少の僧が其の門に立つて食を乞ふた。老婆はその擧止の端正なるに

感じ、止めて門前の小屋に宿せしめた。宿すること稍久しきに及んで老婆はすなはち少女をして之を試みしめた。少女は食を運んで彼の僧の所に抵り、遽かに之に抱着して「此時の想如何」と問ふた。僧平然として答へて曰く、「枯木倚寒巖、三冬無暖氣」と。少女以て老婆に告げたところが、老婆の曰く、「吾久しく此の愚蒙の少年を養へり」と即時に僧を追つたといふことである。此の僧が少女の己に近づけるを見て、枯木の寒巖に依れると等しき觀を爲し、之が爲に心を動さなかつたは甚だ高きが如くであるが頗る作爲の迹あるを免れぬ。美なるを美なりとして、而も之が爲に心を擾さるゝこと無きに至り、はじめて能く道を得たる者である。

空觀は斯の如く、有觀に囚はるゝ者の弊を救ふに極めて力あるものであるが、空觀に囚はるゝの弊は、有觀に囚はるゝの弊と擇ぶ所がない。凡そ世に有るものは、悉く當に有るべくして有るのである。偶然といふは是れ知

ることの極めて淺きを表するの語に過ぎぬ。深く究め諦みづからに知れば、一として偶然なるものは無い。例へば一片の木葉の風に弄ばるゝを見れば、何人も其の定住無きを哀まざるを得ぬであらう。然れども細に之を究め來れば、木葉の落つるのは當に落つべき事情を具へ、其の當に落つべき時にあひて落つるのである。風の發するのも其の當に發すべき順序によつて發し、其の當に進むべき方向を取つて進むのである。此間に一も偶然と稱すべきものは存在せぬ。宇宙の凡ての現象を支配する因果の理法は斯る一片の木葉の轉々飛散する際にもまた儼として存するのである。斯れば事物に差別のあるのは當に分るべくして分れ、當に異なるべくして異なるのである。たとへ忽爾として起り忽爾として滅する幻像と雖も、偶然にして生ずべき理はない。其の起るには必ずや因あり、其の滅するには必ずや緣あり。何ぞ妄りに之を輕んずべきであらう。

譬喩經に群官の象を評する事を擧げ、差別に囚はるゝ者の妄を曉してある。多くの盲人が象を捉へて各之を評して居た。其の耳を捉ふる者は曰く、象の形は帚の如しと。其の脚を捉ふる者は曰く、象の形は漆桶の如しと。其の脇を捉ふる者は曰く、象の形は壁の如しと。其の尾を捉ふる者は曰く、象の形は拂子の如しと。而して一人も眞に象の形を解し得たるものは無かつた。此の譬喩はよく世間の差別相に囚はるゝ者の愚を描いて、之を悉せるものである。然れども若し其の耳を取つて、是れ象にあらずといひ、其の脚を取つて是れ象にあらずといひ、其の尾を取つて是れ象にあらずといひ、斯の如く一々之を捨て去つて別に象の全身なるものを求むるとも、何ぞ能く之を得られやう。是故に耳目脚尾の一に拘る者も非なり、耳目脚尾の一々を輕んずる者も亦非である。その一々を詳にして而も一々に拘はらず、之を綜合して悉せる者にして初めてよく象の全身を知り得べきである。

斯く有空の二觀に囚はるゝことなく、之を綜合して其の真相を得んとするものが即ち中觀である。

此の立脚地よりして觀る時には、煩惱に囚はれ罪惡に充ちたる者の必ずしも憎惡すべからず、必ずしも排斥すべからざることを感ずべきである。また佛陀が之を憎惡排斥したまはず、共に『悉是吾子』の中に含まるゝ者と視て、之を哀愍救護したまへる意も明になるであらう。釋尊は其の意を語りたまふに、『譬へば七人の子あらんに、父母の愛すること遍からざるに非れども、病子に於て父母の之を念ふこと殊に深きが如し』と。(涅槃經)此の如き大慈悲心は、空觀に囚はれて偏に煩惱を憎み罪惡を敵とする徒の想像も及び難き所である。若し空と有と相對せしめて之を觀る時には、高下相同じからず淨染相異つて居る。小く囚はるゝものは、大に囚はれざる者に如かず、細く拘はる者は、汎く容るゝ者に如かぬのである。然れども更に之

を達觀し來れば、大の外に別に小あるにあらず、淨の外に別に染を認むべからず。譬へば水と波との如くである。波には大小高下あれども、水は之が爲に増減多少を爲さずといふはこれ有に對して空を觀ずるものである。波の大小高下を知つて水に増減なく多少なきを知らぬのは愚である。しかし此の波は水より以外に存するのではない。水はこれ波、波はこれ水なりと見るのが、眞によく波と水とを知る者である。これ即ち中觀に依るものである。又譬へば空と雲との如くである。雲の去來は常に變ずれども、空は萬古一碧更に變ずることは無い。しかし空より外に雲あるにあらず。雲の來るも空の中なり、雲の去るも亦空の中である。斯の如く觀ずるのが、よく空と雲とを知るものである。即ち是れ中觀に依るものである。今煩惱に染まざる佛の法身を認むるは、波の高下大小によつて増減なき水を觀ずるが如く、雲の去來によつて變ぜざる空を觀ずるが如くである。

而も更に遡つて之を求むれば大小高下の波は悉く此の水よりして起り來るのである。或は去り或は來る所の雲は悉く此の空の中にあつて去來するのである。此の如くに觀じ來りて差別と無差別との一切の本源を爲せるものを求むれば、こゝに絶對的な存在を認め得るであらう。之を名けて即ち如來藏といふのである。能く如來藏を認むるものは、煩惱を卑んで特に之を隔つることを爲さず。特に之を隔てずと雖も、また之に囚はるゝことも敢てせぬのである。靜に自ら慈悲を行じ智慧を養ひ、努めて敢て怠ること無きが故に、煩惱は漸くにして滅し去る。煩惱漸く滅すると共に、如來の法身は漸く其の心中に成就し來るのである。大莊嚴菩薩の謂へる所の「垢無く染無く所著無き」境界は斯くして開かれ、「道風徳香一切に薫ずる」作用も斯くして生じ來るべきものである。

餘論 (卅三)

涅槃經には「衆生の見を起すに凡て二種あり、一は常見にして一は斷見なり。是の如き二見は中道と名けず。常も無く、斷も無きを乃ち中道と名く」とある。再び前論の水波と空雲との譬を取つて見やう。波に大小高低あり、而も其の大小高低は常に變化する。此の變ずる所を見て之を無常なりと爲し、水には少しも増減多少の無いことを知らぬのが、是れ即ち斷見である。たゞ其の變ずる方のみを見るのである。雲の去來して常なきのみを見て、天空一碧萬古に亘つて變ぜぬことを知らぬは、是れ即ち常見である。又或は波の忽ち高まるを見て、永く斯の如くであらうと思惟し、雲の忽ち集るを見て、永く斯の如くであらうと思惟する者もある。是れ即ち常見であつて、無常なるものを見て以て常なりと爲すの妄想である。此の兩者は共

に中道を得ぬ者である。

常見を執る者は常に人と仇讎と爲り、斷見を執る者は常に獨りを善くして人を顧みぬ。共に佛の呵責を免れぬ者である。而して世人の常見に囚はるゝのは、其の斷見に墮つる者に比して固より極めて多い。凡そ世人の執著する所は勢利なり、名聞なり、其他耳目を樂しませ心身を安からしむべきものは一として其の情を惹かぬは無い。菩提心論に、「凡夫は名聞利養、資生の具に執著し、務めて以て身を安んぜんとす」とあるは、簡にして悉せりといふべきである。此等のものは一として常住なるは無い。吾が周圍の事情も、吾が身心の状態も共に刻々變化して休まぬ、何ぞ此の際に於て常住不變なるものを求め得られやう。而も世人の多くは不用意なること古話に所謂刻舟の人にも異らぬ。むかし楚の一小邑に寶劍を藏する者があつた。他郷人の來襲した時に、其の劍を奪はれんことを恐れ、舟を江上に浮べ、

劍を取つて舟中より之を水底に沈めた。しかし其の所を失つて他日取出し難からんを慮り、其の舟の一方の舷に刻して、劍を沈めた所を記し、他日此處に來りて索めんのみといつて、欣然として舟を返して其家に歸つたといふことである。彼の常見に墮せるの徒の爲す所は多くは斯の如くである。之に反して一切の事物は盡く變化常なしと視て何等常住のものを認めぬを斷見の徒といふ。斷見に墮するものゝ赴くべき路は二ある。その一は一切頼むに足らずとして之に心を繋げず、獨り自ら囚はるゝ所なきに安んじて、泊然淡然たる生涯を送るのである。斯の如き者は世を毒し人を害することは無いけれども、恩愛情誼一切を擧げて頼むに足らずと爲すが故に、冷酷主我の風に陥らざるを得ぬ。又他に一類の斷見に墮せる徒がある。人生一も常住のもの無く、盡く刹那に變化し去ると觀するが故に、たゞ眼前の快を恣にすればそれで足りて居る、何ぞ明日を問ふを用ゐんやと主張し

て、放逸の行を恣にして更に憚る所が無い。又斯る見地よりすれば人間の歴史の如きは、全く信ずるに足らざるものとなる。人々は皆見る所を異にし、日々の事は皆變遷推移して休まぬ。今日相傳ふる所の事も半は既に真相を得ぬ、何ぞ百年千年の後にして其の事の實際を捕捉し得られやう。史上の偉蹟嘉行の如きは悉く後人の假托と空想とに過ぎぬと冷視し去るのである。

斯の如くなれば常見に墮せる者と、斷見に墮せる者と、その赴く所は相同じからぬけれども、正法の流布を妨げ、惡恩に報ずる所以を辨へざるに至つては則ち一である。之を呵責して其の過を自覺せしむることは是れ實に佛弟子たる者の責任である。

餘論 (卅四)

佛は一切衆生を悉く子として視たまひ、之が救護に心を勞せられた。所謂「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」である。而も一切衆生は多く此に想ひ到らず、日夜たゞ其の私に徇ふのみである。たとへ佛は之を子とし視たまふあるも、自ら佛の子たることを知らねば、未だ眞の佛子とは稱し得べからず。たゞ佛恩の辱きに感じ、佛の心を以て吾が心と爲さんことを誓ひ、力を盡して佛の化導を賛け奉らんと覺悟せるものにして、初めて眞の佛子と呼ぶべきである。法華經信解品の中に説かれたる所は、尤も詳に此の關係を説明せるものと稱せらるゝのである。

人あり其家大に富み、財寶無量にして倉庫盈溢し、世人之を長者と呼んだ。其一子は幼稚無識にして父を捨て逃逝し、諸國に周流すること五十餘年に及んだ。父は深く之を憂念して四方に尋ね求むれども逢ひ得ずして暫く一の都城に止まつて居た。乃ちこゝに一の舍宅を建て、象馬牛羊より輦輿

車乗まで夥しく具へ、僕従の者また極めて衆く、又此の長者の爲に利を得る所の者が常に多く来て圍繞恭敬し、王者にもまた愛念せられた。されども年既に朽邁なれば益々其の子を憂念し、夙夜に惟念して「我死の時將に至らんとす。癡子我を捨て五十餘年、庫藏の諸物當に之を如何すべき」と考へてゐた。時に彼の子は大に窮し、衣食を、求索して邑より邑に至り、國より國に至り、或は得る所有り、或は得る所無くして飢餓羸瘦し、漸次に經歷して父の住れる城に來た。そこで備はれんことを求めて、圖らずも父の家に來たが、父は門内に於て大寶帳を施し、師子の座に處り、眷屬圍繞し諸人侍衛してゐた。窮子は父の豪貴莊嚴なるを見、是れ國王か若くは王に等しき人であらうとて大に驚怖し、馳せ去つて貧里に來り、備作を求めやうとした。長者は遙かに其子を見て直ちに之を識り、即ち使者を遣して、捉へ來らしめた。窮子自ら念ふに「我罪無くして執へらる、此れ必定して死せん」と、終に悶

絶して地に倒れた。

長者は子の志意下劣にして、たとへ我が子なりといふも之を信ぜぬであらうと知つたので、乃ち釋して去らしめ、更に餘人の形容憔悴して威徳無き者を遣はし、「汝を雇ひて糞穢を除はしめ、倍して汝に價を與へん」と告げしめたので、窮子は歡喜して隨ひ來り、爲に糞穢を除ひ、諸の房舎を淨むるのを業としてゐた。長者は曠より常に其子を見て、その愚劣にして樂んで鄙事を爲せることを知り、自ら鹿弊垢膩の衣を著て之に近づき之を勸め勵まして「汝常に此にて作せ、復た他に去ること勿れ、汝に價を加ふべし」といひ又之と約して「我は老大にして汝は少壯なり。汝常に作さん時に欺怠、瞋恨、怨言なくば、今より汝を吾が所生の子の如くせん」といひ、即ち假に之と親子となつた。窮子は此の待遇を欣べども、なほ自ら賤人であると思ひ込んで、前の如くに糞穢を除ひ、又多くの年を経た。其後長者は子に命じて

金銀珍寶及び諸の庫藏の物を領知せしめ、少時を経て、子の心が漸く通泰にして大志を成就し、自ら先の心を鄙しとするほどになつたことを知つた。因て自ら死に臨んで親族國王大臣刹利居士等を會し、乃ち自ら之に告げて「此は是れ我が子なり。吾を捨て逃走し伶俚辛苦すること五十餘年。我愛を懷きて推ね覺め忽ち此間に遇ひ得たり。此れ實に我が子なり、今吾が所有の一切の財物は皆是れ子の有なり」といつた。是の時に窮子は父の言を聞いて大に歡喜し、自ら念ふに「我本心に求むる所無かりき。今此の寶藏自然にして至りぬ」と。

此の長者は即ち如來である。窮子は即ち一切衆生である。其の諸國に流浪したのは、即ち煩惱に執はれて生死の間に漂へることである。長者が之を雇ひて先づ賤役を興へ、久しくして後に寶物金銀を領知せしめたのは即ち如來が方便を以て先づ小乗を説き、漸く大乘に誘ひたまへることであ

る。終に長者が一切の財を譲り與へたは、即ち佛の唯一佛乘を説き顯はしたまへることである。因て迦葉等は佛恩を謝し奉り、「今我等方に知りぬ、世尊は佛の智慧に於て憍惜したまふ所無しと。我等昔より牙真このかたに是れ佛子なれども、而も但だ小法を樂へり。若し我等にして大を樂ふ心有らば、佛則ち我が爲に大乘の法を説きたまへるならむ。今此の經の中には唯だ一乘を説きたまふ。……我等本心に佛求する所無かりしも、今法王の大寶自然にして至れり。佛子の應に得べき所の如きは、皆已に之を得たり」といつた。

獨り迦葉等のみならず、何人と雖も大乘を信じ菩薩の行を勵まんと志を立て、敢て懈怠なき者は、共に佛の眞子と稱せらるべき者である。

餘論 (卅五)

既に諸佛の覺の等しきことを知り、又諸佛の教の同じきことをも知つた。茲に於て諸佛の世に出現したまへる因縁を究め、是れ唯一絶對なる本佛が身を分つて世に現はれたまへる者なることをも知り得た。天台大師は之を天上一輪の月が影を萬水に宿せるに譬へ、たゞ諸佛の尊むべきを知つて唯一絶對の本佛の在せることを知らぬ者を『天月を識らずして但だ池月を觀る』と評した。猶ほ此の本佛が神通の力を以て種々に身を現じたまひ、管に佛身を現ずるのみならず、其の宜しきに應じて種々の身を現じ、種々の法を説きたまふことを信じ、其の説法は常住のものなることを信ずる時は、東西古今の有らゆる聖賢の教が盡く佛教の一部分を爲せるものとして解せらるべきことも、前章に於てほゞ論及した。

而して佛法の世に流布して廢せざるべきは、佛の吾等に對して明言せられし所であるが、其の流布の終局する所は、『十方世界通達無礙にして一佛

主の如し』と、法華經神力品に示された所に於て最も明瞭である。即ち此の娑婆世界も共に一佛土となるのである。所謂常寂光の土と化し畢るのである。娑婆とは忍土の義である、苦多くして忍ばざるべからざる所との意である。而も此の忍土にして忍土たらざるに至る時は、即ちこゝに住する者が盡く佛身を成ぜる時でなければならぬ。何となれば此處に一人たりとも未だ覺を得ざる者のある間は、佛の御心に苦の絶ゆることは無かるべきである。『一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり』とは涅槃經の中に宣説せられた所である。斯れば吾等凡夫と雖も皆共に佛性を具せる以上、その遲速難易の別はあつても、終には共に佛身を成就すべきに定まつてゐる。梵網經に謂ふ所の『我は是れ未だ成ぜざるの佛』とは、吾等の皆共に俱に信すべき所である。今に於て吾等と諸佛とを比ぶれば、その徳の高下、その力の大小、まことに天淵も管ならぬものであるが、後に

至れば吾等と諸佛との間に些の懸隔もなきに至るべきである。斯く觀じ來る時に、諸佛が唯一本佛の分身なるが如く、我等もまた本佛の力の外に立つものでないことが疑へぬやうになるのである。

更に進んで之を案ずるに、吾等を繞れる天地山河草木鳥獸、また決して相隔つべきではない。梵網經には、『若し牛馬猪羊一切の畜生を見んにも、應に心に念じ口に言ふべし、汝は是れ畜生なれども菩提心を發すべしと。而して菩薩、一切處の山川林野に入りても、皆一切衆生をして菩提心を發さしむべし』とある。斯く天地間の一切萬物悉く佛性を具せざる無きことを認めて、はじめて眞の菩薩行を完うし得べきである。近世歐洲に於ける自然科學の發達は、特に生物と無生物と分つの非なることを明にし、又特に精神現象を物質現象と分つの非なることを明にしたるが、是れ草木國土にも悉く佛性ありとの思想と相契合せるものといふべきである。斯く觀じ來

りて吾等は諸佛と相隔らざると共に、有情非情の一切とも相隔らざることを知り、共に本佛の力の發現に外ならざることと認めて讚歎の念を深くせざるを得ぬのである。壽量品に「如來秘密神通之力」とあるは其意深しといふべきである。

餘論 (卅六)

煩惱は絶えず吾等の心を擾して、絶えず種々の苦を生み、絶えず種々の罪を生じ。而も本經に於て「煩惱は心に觸せず」と斷ぜるは如何、他無し、煩惱に常住なるものが無いからである。觀普賢經には「心を觀ずるに心無し、顛倒の想よりして起る。此の如き相の心は妄想よりして起る。空中の風の依止する處無きが如し」とある。夫れ吾等を繞れる現象界は常に流轉變化して、瞬時と雖も住らぬ。此の流轉變化の中に在つて、絶えず眼耳鼻

口身意を勞し、之によつて種々の煩惱を作るのである。その眼耳鼻口身意に受くる所の絶えず變化するに伴ひ、心に作る所の妄想もまた變化して休することは無い。宛も水面の波の絶えず動き、波上を吹く風のまた絶えず動くが如くである。一瞬前の波は一瞬後の波にあらざり、一瞬前の風は一瞬後に於て既に遠く去つて居る。斯くして繚亂に繚亂を重ね、苦惱に苦惱を加ふるのである。斯く絶えず起滅して、少しも止まること無き煩惱は之を『心に觸せず』といはねばならぬ、即ち觸するとは相與に在るの義である。

されば煩惱を掃ひ盡せる後の心は、宛も大波小波の消え去りたる水面の如く、去來の雲の絶えたる天空の如く、全く清淨靜寧にして、全く煩惱の痕を止めぬのである。昔し大醫禪師、鑑智大師を禮して曰く、『願はくば和尚慈悲を以て、乞ふ解脱の法門を與へよ』。鑑智曰く、『誰か汝を縛せる』。大醫曰く、『人の縛する無し』。鑑智曰く、『何ぞ更に解脱を求むるや』。大醫言下に

大悟すと。(傳光錄に山出づ)其れ己を縛するものは己である、人の來りて縛するのではない。己の縛するものは己之を解き得べきである。之を解き了れば更に一物の迹をも止むるものはない。猶ほ風止み波靜まりて天と水と共に清きが如くである。瑩山和尚の所謂『月明水潔秋天淨、豈有片雲點大清』とは此の義であらう。

夫れ煩惱は心を擾せども、其の痕を後に止むることは無い。故に如何なる罪惡を重ねたる者と雖も、深く其の罪を悔いて菩提の道に入り、菩薩の行を勵んで怠らず、其の智慧の光煥發し、その慈悲の行よく衆生に利益し、善根を植えること衆多なれば、終には成佛をも許さるべきである。彼の提婆達多は佛敵として有らゆる惡逆を行つたが後に佛と成り天王如來と稱すること許された(法華經に由る)又阿闍世王は提婆の言に、惑はされて佛敵となり、父母を幽閉して自ら王位を奪ひ、後に父王を殺害した。けれども滿身に瘡

を生じて大に惱み、文殊師利の説法を聞いて初めて悔悟し、釋尊の所に詣つて罪を懺悔したが、それより漸く善行を積んで終に辟支佛たるの果を得た。又舍衛城に任せる外道に央掘摩羅（あやうまら）なる者があつた。人を殺すは涅槃を得る所以なりとの邪説を信じ、市に出て人を害し、一々にその指を切つて自ら頭に懸け、之を鬘とした。斯くて人を害すること九百九十九人に及び、更に自己の生母を害せんとしたが、釋尊之を憐愍して教を與へたまひ、之により改道懺悔して佛門に入り、後に阿羅漢となることを得た。（阿闍世經、及び毘羅のあり、その事蹟を記すること詳である）此等は皆煩惱を掃ひ去つて正覺を得たる例證とするに足るであらう。

彼の不輕菩薩が途に相逢ふ人毎に之を禮拜して「我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以（ゆゑ）はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて、作佛することを得べし。」といひ、人或は之を罵詈訛し、或は材木瓦石を以て之を打擲すれども更に

瞋らず、避け去りて遠くに住（ま）まり、なほ高聲に唱へて「我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作佛すべし」といつたとは、法華經不輕品に記せらるゝ所である。併せ觀て發明する所あるべきである。

餘論 (卅七)

本經に三種の善男子善女子を擧げてある。一は其の機根尤も聰利にして、能く佛の大乗の説を信じ、終に自ら智慧を成就せる者である。二は斯の如くに機根の勝れたる者ではないが、能く學び能く究めて懈らず、漸く智慧を成就し得るに至れる者である。三は自ら深く究むることを得ず、自ら諸法に於て了知すること無しと雖も、たゞ深く佛を信じ、佛の命じたまへる所を守つて敢て違はぬ者である。此の三種の人を除いては、盡く邪見の徒にして正法に違背する者なれば、之を責めて其の邪見を翻し、正道に歸せしめ

なければならぬ。

既にいへるが如く修行は因にして徳を成すは果なれども、此の因を助くるに縁が無ければならぬ。若し妄説邪論を聴くこと屢々なれば、自ら正道を修めんとの念を壞られ、終に邪惡の徒に混じ、其の具有する所の佛性を開發長養せしむることは出来ぬ。これ惡縁にあへるの禍である。法華經に「佛種は縁に従て起る」とあるは、即ち善縁のことである。善縁とは正しい教法のことである。されば正道に背いて邪説を奉ずる者は、自ら己を損ふのみならず、衆を惑はして正道に遠ざからしめ、永く惡縁を絶ち得ざらしむる者である。本經に「種子を腐敗する者」といふは、自他に亘つて之をいつたので、即ち佛性を昏まして永く其の光を發し得ざらしむるの謂である。此の如き徒を調伏するについては、王力をも共に用ゐなければならぬ。蓋し人ある所には必ず國あり、人は皆國民として其の生を送る者である。

國あれば此處に國風あり民俗あり。國風民俗の人を化するや極めて大である。國を治むる者は王である。王は常に君として民に臨むべきのみならず、父として之を養ひ、師として之を導かなければならぬ。是故に正法を護つて其の流通を助け、國風民俗を醇ならしむることを努むるは、是れ國王の責任である。若し邪教を奉ずる者ありて迫害を正法に加へ、其の凶暴を逞うするにあへば、干戈を執つて之を征するも亦た已むを得ざる所である。佛の戒律を制するや、殺生戒を以て其の首に置き、之を禁ずること殊に嚴である。然れども正法を擁護せんが爲に殺生を敢てするは、是れ犯戒にあらず、犯戒と雖も猶ほ持戒の如くに之を貴むべしと教へられてある。

涅槃經には有徳王が覺徳比丘を擁護せんが爲に干戈を執り、終に戰死したる事蹟をあげ、之を成佛の因としてある。而して之を釋して、「若し五戒を受持する者あるも、名けて大乘の人と爲すことを得ず。五戒を受けざる

も正法を護ることを爲せば、乃ち大乘と名く」とある。また、「正法を護る者は當に刀劍器仗を執持すべし。刀杖を持すと雖も、我是等を説き、名けて持戒と曰はん」ともある。又大集經には、「若し國王ありて無量の世に於て施と戒と慧とを修すとも、我が法の滅せんとするを見て、捨て擁護せずんば、是の如く種ゆる所の無量の善根は悉く皆滅失せん」とある。聖徳太子が王力を以て正法を擁護するに努めたまへる如きは真によく菩薩道を行じたまへる者と稱すべきである。

餘論 (卅八)

波斯匿王は父にして勝鬘夫人は子である、王先づ佛に歸依し奉り、夫人に勸めて同じく佛に歸依せしめたのである。然れども勝鬘夫人の深く佛を信じ奉りて大乘の教に通達するに及んでは、王も亦た遠く及ばざる所があ

る。即ち徳を修め善を積むに當つては、少長を分つべきにあらず、尊卑を論ずべきにあらざるを知るべきである。古人の語に「道に當りては師に譲らず」とある。何ぞ獨り師とのみいはんや、君父に對しても何の譲るべきことがあらう。又友稱王は夫にして勝鬘夫人は妻である。印度の國俗として妻の地位は遠く夫の下に在る。而も勝鬘夫人が大乘の教に通達し、佛の讚嘆したまふ所となるに及んでは、友稱王も自ら屈して其の教を受け、更に力を協せて城中の人民を教化するに努めた。此の如くに私意を去り、名利勢權をすて、専ら力を正法の弘通に致せるもの、之を眞の佛弟子と稱すべきである。

而して釋尊は更に勝鬘の説ける所を以て帝釋及び長老阿難に告げ、之が弘通を命ぜられた。帝釋と阿難とは共に歡んで佛命を奉じた。夫れ勝鬘は妙齡の一婦人である、而も其の説ける所は佛の讚めたまふ所にして、帝釋

と長老阿難との共に奉ずる所である。此に至つて人間に於ける尊卑の差
 勝劣の別は全くその光を失つた。昔者、般若多羅尊者菩提達磨尊者に向つ
 て、「諸物中に於て何物が最も大なる」と問うた。菩提達磨は答へて「法
 性最も大なり」といつた。深く意を此に留めて、自ら修むるに解怠なくば
 何ぞ人天の共に尊敬する所と爲り得ぬことがあらう。たゞ須らく勇猛精
 進すべきのみ、其の遅速と難易との如きは問ふべき所ではない。

勝鬘經通解 (終)

(終)

大正拾壹年五月十一日印刷

大正拾壹年五月十四日發行

勝鬘經通解

正價金貳圓參拾錢

著作者 小林 一郎

發行者 阪本 眞三

印刷者 吉田 松次

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

不許複製



發行所

東京市神田區表神保町七番地
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

東京帝國大學文學部助教授文學士 植松 安著 (類書中の白眉)

七版 古事記新釋

四六判最上製美本
全一册五百餘頁
正價 貳圓五拾錢
送料十八錢

著者はこの古事記を説くに當つて神代の巻に最も力を注いだ事を一言して置く。素引については單語の解説を見出し得るのみならず古事記本文の事項を採り得るから目錄の代用となる。●難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書下し振假名を附し詳細なる語義と素引を添ふ。著者が國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各篇章に顯はれて大和民族發展の由來を明にし國民歸嚮の中心を説く是れ本書の特長なり。今や大戦後世界思想の急激なる變遷は將に我々國民思想に及ばんとす世界の日本東洋の日本我等の日本これこそこの事に得よ。

東京帝國大學文學部助教授文學士 植松安新著 (四六判最上製美本全貳册 紙數壹千參百餘頁箱入)

再版 註釋 假名の日本書紀

(上卷)
金參圓五拾錢
(下卷)
金參圓八拾錢
送料各廿四錢

日本書紀の一體に假名日本書紀といふものゝ存する事は從來一部の學者に知られて居たが未だ普く其存在を知る人が少い。本書は著者が出來るだけの手を盡して調べ得た廿餘種の異本を参照して著述したものである。内容は本文を漢字交りに書下し漢字に振假名を附し假名に漢字を當て一段毎に簡明なる註釋を加へ索引として辨ずべき詳細なる目錄を添ふ。我國體の淵源を知る國民性の本質を明かにせる正確なる國史を最も平易に讀み得る書である。學者政治家教育家神職を初め其他何人も是非一讀すべき書である。

發兌 京市神田區 表神保町七 大同館書店

大同館發行圖書目錄

文學博士 紀平正美先生新著

九版 自我論

本書「自我論」一篇は全く自分の觀念論の上に立脚して組織したものである。前編「自我の分析」に於ては出來得る限りの分析を試みた。廣義に於ける教育者或は人の上に立つ人には其方法上に多少の参考書となるべきものと信ずる。後編「人格の價值」に於ては人格の意義と價值とを論理的に定めんと企てた。即ち理想の何ものたるかを論じて哲學○宗教○道德其他一般に人文現象の根柢となるべきものを定め以て現代人の趨くべき方法を示さんと計つた積りである切に學者の批評を待つ。 — 著者識 —

四六判最上製美本
全壹册紙數約五百頁
正價 金貳圓
郵稅金十二錢

文學博士 紀平正美先生新著

五版 改訂 人格の力

本書は今より十一年前に一度江湖に愛讀を得たものであるが其後久しく絶版せられてゐた。然るに昨年末に其姉妹篇たる「自我論」を出版したに就て再び讀者から要求が出たので同書の出版社からして再び世に出る事になつたのである。然し十一年の間に社會の事情も非常に變化した。自分の思想も亦多少展開してゐるのであるから其の儘での再版は到底許す事が出來ない。それで全部書き改めて自分の責任を新にしたのである。もと四拾錢の定價のものに壹圓五拾錢になつた。内容に其れ丈の差があるか否かは讀者の判定に待つべきであるが自分からは時代の推移と諦められん事を願ふのである。 — 著者識 —

四六判最上製美本
全壹册三百廿頁
正價 圓五拾錢
郵稅金十二錢

◇大關増次郎氏新譯◇ —(哲學研究者唯一の入門書)—

三版 カント哲學批判

四六版最上製
美本全一册
正價金貳圓
送料十二錢

哲學する時代は來た。思惟の思惟なくんば一切の原理を失ひ、人生は其の根據なきに苦しまねばならぬ。哲學に於けるコペルニクス的轉廻はこれをカントに見る。カント哲學の洗禮を受けずして眞に哲學することが可能であらうか。カントより新理想主義へ、新理想主義からヘーゲルの復活への道を辿らうとする者は先づ近世哲學史の權威クーノフイツシャールのカント哲學批判に傾聴するの最も有意義なるはこゝに賛言を要しない。これ眞學なる思惟に生きんとする士に本書を薦める所以也。

◇文學士 林 録次郎氏新著◇ —(教育研究者必讀の要書)—

新刊 大ベルリンの教育

菊版最上製
美本全壹册
正價金五拾錢
送料十八錢

教育第一!! 教育の時代は來た。準備縮小は教育立國策を必要とす日本の孤立無援は獨逸以上教育の時代は來た。教育の外にない。教育の時代は來た。國民眞劍の教育の時代は來た。事業は教育である。而して吾人はこれが範をドイツに求めねばならぬその粹を鑑め確な大文字である外人の見たる獨逸教育の精髓である國字版刺中の最大權威である徹底的國家教育を求むる者は來れぬ校教育社會の實際を知らんとする者は速に本書を讀め。

東京高等師範 中村久四郎先生 高橋與惣先生新著

文部省檢定 東洋通史

菊判最上製美本全一冊紙數九百餘頁正價金四圓八拾錢郵稅二十錢

本書の組織は現今中等學校の教授細目を適宜配合して四編六拾五章に分ち著者多年の實地的經驗を基礎とせる獨創の排案に據り上下五千餘年に亘れる諸民族の盛衰興亡より政治・風俗・學術・文藝・宗教・制度の一切を網羅し東洋史實を盡く有機的連絡の下に最も平易正確懇切に通説せり。そして從來の東洋史の最大缺點たる記述の無味乾燥及び繁雜に過ぎずば簡易に失せる缺點・地名人名の難讀・官職の難解等を補ひし外古今東西史學者の披瀝せる學說の穩健なるものは努めて之を採録し一々出所出典を明示して研究者の便に資せり。又文部省檢定試驗問題の第壹回より最近に至る迄の分を盡く明瞭に解答し之を本文の間に分載し以て受験者に一大秘庫を提供せり。要するに本書は文檢受験用の名を冠すと雖も一切の史實を通説せるは勿論古來日支兩國の關係殊に最近世東洋外交上の事件人物を詳説したれば當に中等教員小學教授參考及文檢受験者の一大秘庫たるのみならず史學研究者世の識者も亦座右に備へて大に裨益なかるべからず。

東京大同館發行

東京市神田區 表神保町七

大同館發行

東京八七番 振替貯金口座

東京帝國大學文科助教授 文學士宇野哲人先生新著

四書講義 大學

菊判最上製美本
全壹册參百五拾頁
正價金貳圓
郵稅金十二錢

好評 三版

大學は儒教の目的を最も善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所、此書は如上の見解によりて平易明晰に講述せるものにして冠するに大學要旨を以てし附するに索引及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟もくも儒教の何物たるかを知らんと欲せば必ず此書を繙いて著者の闡發せる講話を聞かざるべからず。

東京帝國大學文科助教授 文學士宇野哲人先生新著

四書講義 中庸

菊判最上製美本
金壹册貳百八拾頁
正價貳圓五拾錢
郵稅十二錢

好評 四版

儒教の目的は大學に備はり、儒教の根本義は中庸に明かである。かくて中庸の二書は經となり緯となり。互に相待つて儒教の眞相を傳ふ。著者は如上の見解を以て先に大學講義を著しし今亦中庸講義を著す。大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は附ふ更に中庸に就いて儒教の眞面目を了せむ。尙附錄數篇は皆直接間接に中庸の意義を明かにするものである。

文學士小林一郎先生新著

第三版 自由の生活

四六紙
最上製美本
五百五拾頁
正價金貳圓五拾錢
郵稅十二錢

思想界の混亂は實に未曾有である。吾等は此間に處して如何に吾等の活路を開いて行くべきである

か今は徒に樂觀するを許さぬ又徒に悲觀すべきで無い。之を過去の經過に徴し現在の情勢に照して今後の立場を確と定めなければならぬ著者は此の見地から日本の文明の過去及現在に對して自由なる批評を試みた。現代に處して意義ある生活を爲さんとする人々の一讀を勧める殊に青年の人々と青年の指導の任に在る人々は必ず精讀すべきである。

内容 目次

萬事は是からである。誰が責任を負ふのか。國は自分のものである。武士と百姓町人。忠義を誰に盡すのか。倭寇と海外貿易。町人の意氣抱負。自ら重んずるの心。徳川氏三百年。事無から主義。鎖國の二百年。利用厚生。流れる水は腐る。町人の氣焔の吐き所。西力東漸の勢。幸運に狎れてはウラぬ。尊王攘夷。眼を大局に注ぐ者。國家の柱石たる覺悟。少壯者の時代。國體の精華。皮相なる西洋文明觀。近世文明の特色。貴き犠牲。自ら侮れば人之を侮る。日本人は劣等の人種か。百年の後と信仰。功利主義の繁昌。自由平等論の勃興。自治とは何であるか。世界の眼。百年の後

●●●大近松の時代淨瑠璃傑作選集出づ!!●●●
 ◎小林榮子女史校訂◎ (四六判最上製美本 金五圓五拾錢 送料金廿四錢)
 (千三百餘頁箱入)

最新刊 近松傑作時代淨瑠璃集成

近松遊いて既に二百餘年世に其の天才を讃嘆する者益々多きを加ふるは偶然にあらず就中其時代淨瑠璃は趣向の雄大描寫の鮮麗なる文章の雅建なる後世作者の到底企て及ばざる所なり。今其中に於て殊に傑作と稱すべきものを精選し用語には一々適當なる漢字宛故事には一々正確なる考證を加へ義に世話淨瑠璃の校正に費したるに數倍する精力を傾けて本書を成せり。苟くも近松の眞面目を知らんとする人は必ず一本を手にせざるべからず

内容目次

出世景清	百合若大臣野守鏡	日本振袖始	雙生隈田川
釋迦如來誕生會	吉野都女楠	會我會稽山	傾城反魂香
百日會我	狐山姥	傾城酒吞童子	室町千疊敷
最明寺百人上臈	孕常盤	本朝三國詩	信州川中島合戰
雪女五枚羽子板	國姓爺合戰	平家女護鳥	關八州聚馬

東京市神田表神保町
 大同館藏版

大同館發行圖書目錄

◇津田光造氏新著◇ (山本鼎畫伯裝釘) —

新刊 長篇 大地の呻吟

四六版最上美本
 全壹册四百餘頁
 金壹圓八拾錢
 送料十二錢

著者が心血を濺ぎて成りし堂々五百枚の大著作
 世のブルジョアの誰でもが持つて居る様なそして持ちたが
 つて居る様な名譽とか人格とか財産とか地位とか乃至は虚
 榮とか云ふものを吉岡信三は持つて居たのであつたが階級
 的で不平等な社會の現狀に絶えず不満を持つて居た彼は遂に自由の無い職業から解放されようとして妻
 を失ひ子供と別れた。彼はその孤獨と悲哀とから免れようとして様々な屈辱と苦みとを経験したが結局
 彼は財産の私有と空虚な各譽心とを無くしてしまふより外に途がなかつた。そしてそこに彼の人格の一
 大破産が來た。

◇三浦修吾氏新著◇ (著者が好んで執筆せし文集) —

忽三版 感想 林檎の味

四六判最上美本
 金壹圓八拾錢
 送料十二錢

災難病苦あらゆる人生の苦難を経て終に人間内在の偉大なる力を把握し得たる著者の生活史思想史に織
 り込まれたる觀察である紀行文あり隨筆あり感想あり著者の卒直なる氣風は本書に於いてのみうかゞひ
 知らる。